

ケネーにおける「生理」の哲学

——『動物生理の自然学的試論』を中心として——

坂 田 太 郎

1

筆者は昨年、ケネーの「明証論」を手がかりとして、そこに盛られた彼の哲学的構想の性格を、コンディヤクならびにマルブランシュのそれと対比させつつ、あきらかにしようとした⁽¹⁾。その趣旨は、フィジオクラトにおける明証の問題のとりあつかいを検討することによって、フィジオクラシの理論的性格を闡明する一助たらしめようとすることにあったが、それはともかくとして、本稿での筆者の狙いは、一応検討を済ませた「明証論」をさらにさかのぼり、この論稿がその概括であると言われる『動物生理の自然学的試論』(*Essai physique sur l'économie animale*, 1736) の第2版(1747年)に追加された第3巻⁽²⁾のなかで展開された構想を中心として、彼の哲学の形成の段階、すなわちケネーにおける「生理」の構想を土台としての哲学の醸成をとりあげることにある。というのは、そこに展開された「生理」の理論と哲学との未分のからみ合いこそ、まさしくケネー哲学の発酵の過程を示めすものなのであって、それは簡単に、「明証論」がその概括にすぎぬものとは言えないふしがあるからであるが、そればかりでなく、動物生理の生理学的研究と密着して推進されたその構想は、ロックの経験論、コンディヤクの感覚論の影響を受けながらも、反面スコラ哲学ならびにデカルト・マルブランシュ哲学の伝統の枠の中にあるものであるがゆえに、これをその当時の啓蒙哲学の潮流の中に位置づけ、したがってまた当時のこうした潮流一般の方向をつきとめる上に、格好の手がかりの一つを提供すると思われるからでもある。

(1) 拙稿, ケネーとコンディヤク, 一橋大学研究年報『社会学研究』3, 所収. 本稿はこの論稿の補稿をなすものである. なお筆者は, 医学だとか生理学だとかには, ズブのしろうとである. だからして, ケネーの動物生理学そのものをとりあつかう資格はないし, またそれほどの興味ももたない. 彼の『動物生理』を, 一応は手がけて見なくてはならないと思いながら, 今日までその勇気が湧かなかったのも, じつはこうした事情からなのである. しかし, 「明証論」をひとつおとりあつかった今日となつては, どうしても, 何らかの形で, それと『動物生理』との関係を見定めておくことが, 研究の筋道からしても, 要請されるところから, 筆者は準備不足(この不足は, いつまで経っても解消しないにちがいないが)をじゅうじゅう覚悟した上で, この題目と取り組まざるをえないハメになった. シュッテルは, ケネーの医学上の業績をとりあつかうに当たり, 彼の諸著作のすべてが, いかにブルハーフェの体系に滲透されているかを確かめるには, 著作にひとつおとり目を通せば充分なのであって, 「なにも医学史の専門家たることを要しない」と, 事もなげに語っているが(「ケネーと医学」, 後出), ズブの素人には, ケネーとブルハーフェとの関係を手さぐりによってたしかめることさえ, たやすいことではなかった. そこで筆者は, 素人のひとりよがりの解釈に落ちこんだりする危険を避けるために, こと生理学にかんしては, 著作を巨細に検討するよりも, 『動物生理』についてのハラーの批判的紹介文やその他二三の医学史的文献を通して, 彼の「生理」の理論に接近する道をとった. この点を, お断わりしておかなくてはならない. その意味で, 本稿は, どこまでも未完のトルソの域を脱しない. 医学史的文献についても, 筆者の見当をつけたものは, 殆んど, 照会先に所蔵されていなかったりして, 参照の便宜が得られなかった. しかしそのことのためにいろいろと配慮を惜しまれなかった慈恵医大の新津恒良助教授と, 基本的な問題について貴重な示唆を与えられた大阪大学の沢瀉久敬教授(教授は同大学で医学概論を担当しておられる)とに対して, この際謝意を表しておきたい.

ちなみに「感覚論」や『動物生理』についての研究文献は, 内外ともに至って乏しい. 筆者の知るかぎり, モノグラフとしてはつぎの諸篇を数えるにすぎない. 久保田明光, ケネーにおける物理的世界と倫理的世界への序説, 『経済学研究』, 第一集. 同, ケネー哲学思想における偶因論の摂取, 前掲稿続篇, 『早稲田政治経済学雑誌』, 第100, 101号. 両篇は後に同, ケネー研究, に収録. Id.: Quesnay, disciple de Malebranche, 《Quesnay et la Physiocratie》, édité par l'Institut National d'Etudes Dém-

graphiques, I, Paris, 1958. 平田清明, ケネーにおける動物生理学と政治経済学, 『一橋論双』, 第 26 巻第 4 号。

(2) この著作の初版は見るができないが, 第 2 版によると, この版で第 2 巻と第 3 巻とが追加されたものらしい。ところでこの著作を, 従来筆者は『動物経済』と呼んできたが, それを本稿では『動物生理』と改めた。《économie》という言葉の意味領域が, この当時は現在と比べて, かなり広がったように思われる点と⁽³⁾, 《économie animale》という用語法が, 決してケネーだけのものでなかったことに注意を促がしておきたいが, それにしても, 「経済」という言葉の意義がかなり専門化してしまっている今日では, やはり「動物経済」では何のことかよく判らず, 誤解を生むおそれもあると考えて, 「動物生理」と改めたわけである。ケネー以外の用語例としては, 例えばつぎの書を参照。Aram Vartanian: Diderot and Descartes. a Study of Scientific Naturalism in the Enlightenment, Princeton, 1953, p. 281.

さらにこの著作の第 2 版は, 一橋大学附属図書館に所蔵されているが, 惜しいことに, 第 1 巻と第 2 巻があるばかりで, 第 3 巻が欠本である。そこで筆者は, 曾つて名古屋大学在職当時, 大阪市立大学附属図書館の『福田文庫』に収められている故福田徳三博士所蔵本の第 3 巻を, 複写させていただいた。この場所をかりて同大学附属図書館当局の御好意に, 深謝の意を表する。

(3) 参考のために, 《Larousse Universel》が《économie》の転意として《harmonie des différentes parties d'un tout》を挙げ, 《économie animale》をその例としており, またリトレ・ボージャンの辞書も同じように, この語を《disposition harmonieuse des diverses parties d'un ensemble, soit matériel, soit intellectuel》と説明し, 《économie du corps humain》をその例としていることを添記しておこう。

ケネーにおける哲学的構想の発酵を検討するに当たっては, 言うまでもなく, 1743 年に出た『王立外科医学会紀要⁽⁴⁾』(Mémoire de l'Académie Royale de Chirurgie) の第 1 巻に寄せられた「序言」⁽⁵⁾(Préface) を無視することができない。この「序言」では, 外科医学の研究法が論じられ, 観察 (observation) と実験もしくは経験 (expérience) とを重視すべきこと, 憶測と類比との濫用をいましめるべきことが説かれるが, そこに科学の研究における「経験論的」態度の表明はあるにしても, そうした態度には, 未だとくに「哲学的」と

して特徴づけられるほどの問題への切りこみは見られないように思う。それはともかくとしてここに言う経験とは、単なる個人個人の特殊な臨床的经验を指したりするのではなく、一般的な経験、「自然学的実験」(expérience physique)、すなわち物理学、化学および解剖学の実験を意味するのであり、それはさらに「実験的自然学」(physique expérimentale)と同義語でさえあることに注意しなくてはならない⁽⁶⁾。それゆえ観察と経験⁽⁷⁾とを重視するとは、ひっきょう理論と実験(践)との統一を説くことに他ならないのである。彼は言う、観察はそれだけでは、表面的なものに終わるおそれがある。だからそれは、「自然学的実験(実験的自然学)の助けをかりて、自然の感性的諸原理(principes sensibles)にまで滲透するよう努めなくてはならない。換言すれば、自然を予知し、それに問いかけ、それをあらわならしめることが必要である⁽⁸⁾」と。同時に反面においてこの実験的自然学は、絶えず観察に堪え、それに支えられるものであることが要求されるのである。

(4) 王立外科医学会は、1731年、マレシャル、ラ・ペロニ、ブティらの手で創設されたものであるが、その背後には、パリの医科大学とサン・コームの外科医学校(Collège de Chirurgie de Saint-Cosme)との、一般に内科医と外科医との、数世紀にわたる闘争の歴史が秘められている。この歴史は、外科医学が医学の一部門としての市民権を獲得するにいたる苦難の歴史であった。マント市の一外科医だったケネーと医科大学の高名な学者であり、国王の顧問医であったシルヴァ(Jean Baptiste Silva)との瀉血(saignée)にかんする論争も、両者の闘争の一環をなすものであったが、この論争に勝を占めたことが、ケネーの名声を高め、ひいてはサン・コームに迎えられる機縁となったことを、彼の伝記は伝えている。彼のサン・コーム入りは、1737年に実現し、翌年彼はそこで、薬学講座の教授(professeur royal)の辞命を授けられた。次いで彼は1740年から48年まで(名目上は51年まで)、外科医学会の書記として活躍したのである。1743年に出たこの学会の『紀要』第1巻が、ケネーの編集にかかるものであることはよく知られている。彼はそれに寄せた「序言」で、当時まだ社会的地位が低く、『simple barbier』とまぎらわしいくらい質のよくない者も混じっていた外科医のあり方を論じて、外科医学の研究法に

およんだのであるが、外科医が旧套 (routine) を脱却し、協力して医学の進歩に貢献するための機関としての学会の意義を高揚することが、この「序言」の終局の狙いだったのであろう。Cf. Gustave Schelle: *Le docteur Quesnay, chirurgien, médecin de Madame de Pompadour et de Louis XV, physiocrate*, Paris, 1907, pp. 29 et seqq. Jacqueline Hecht: *La vie de François Quesnay, «François Quesnay et la Physiocratie»*, I, pp. 221 et seqq. なおケネー自身に、直接内科医と外科医との抗争をとりあつた匿名の著作がある。Examen impartial des contestations des médecins et des chirurgiens, considérées par rapport à l'intérêt public, Paris, 1748.⁽⁹⁾さらに彼は、その娘婿に当たる外科医エヴァンと協力して、この抗争に関する一切の文書と記録とを蒐集し、全部で42巻におよぶ龐大な資料を残しているという。Recueil de pièces et mémoires pour les maîtres en l'art et science de chirurgie. contre la Faculté de Médecine, concernant la déclaration du roi du 23 avril 1743, la première série de 13 volumes, Paris, 1750, les deux autres séries de 12 volumes et de 17 volumes, Philadelphie, 1760. Cf. Hecht: op. cit., p. 248. Tableau chronologique des oeuvres de Quesnay, loc. cit., p. 306. なおこの他に、この抗争に直接または間接に関連して書かれた著作のうち、ケネーのものとされてきた文献が数種あるが、それらの考証についてはオンケンの注記を参照。Oeuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, publiées par Auguste Oncken, Francfort s. M. et Paris, 1888, pp. 810~812. note (2).

ディドロがさる外科医に宛てたつぎの書簡も、この抗争に関するものである。Denis Diderot: *Lettre d'un citoyen zélé qui n'est ni chirurgien ni médecin, à M. D. M. Maître en Chirurgie sur les troubles qui divisent la médecine et la chirurgie* (1748), *Oeuvres complètes*, par J. Assezat, tome neuvième, Paris, 1875, pp. 213~223. そこにはケネーやブティ (Jean Louis Petit) の名も挙げられている。識者は一般に外科医の側に同情的だったといわれるが、ディドロもアセザの指摘するように、その例外でなかった。シェルはケネーとディドロとの交情を伝えているが、ディドロは、王立外科医学会の理事ブティとも親交があった。Cf. G. Schelle: *Quesnay, avant d'être économiste*, *Revue d'économie politique*, 18^e année (1904), p. 209. ディドロの『生理学綱要』(Elément de physiologie, inédit, 1774~1780, publié pour la première fois dans le neuvième tome des *Oeuvres complètes* éditées par Assezat) は、

生理学にかんする抜書・覚書のままの手稿であるが、その成立がアティに負うところ多い事情は、想像にかたくないのである。ただし最近の研究によると、「ヴァンドゥール家蔵ディドロ文書」(Fonds Vandeul) のうちに(その全容はまだ明らかにされていない)、この論稿と内容的にかなり違った、ヨリ整備された「生理学綱要」(1778 年)という草稿があるらしいが、そこにははっきりとハラーの影響がたしかめられるという。Cf. H. Dieckmann: *Inventaire du Fonds Vandeul et inédits de Diderot, Genève et Lille*, 1951. J. Mayer: *Diderot homme de science, Rennes*, 1959.

なおサンマロの医師であり、ブールハーフェの弟子であったド・ラ・メトリのつぎの匿名の著作も、だいたい外科医の側に立って、大学とサン・コームとの対立をとりあつかい、シルヴァやケネーにも触れたものであるらしい。(Silva は De la Forest, Quesnay は Qualisnasmus の名で登場する。Cf. Schelle: *op. cit.*, p. 206.) *Politique du médecin de Machiavel, ou le chemin de la fortune ouvert aux médecins*, ouvrage réduit en forme de conseils par le Dr Fun-Ho-Ham et traduit sur l'original chinois par un nouveau maître ès arts de S(aint) cosme, première partie, Amsterdam, (1745). さらに彼は、この問題に直接または間接に関連して、いくつかの、多くは、匿名のまたは偽名の覚書やコメディを書いているようである。Le chirurgien converti, La Haye, 1748. Saint Cosme vengé, Strasbourg, 1744. Ouvrage de Pénélope, ou Machiavel en médecine, 3 vol., Genève (Berlin), 1748~1750. La Faculté vengée. comédie en trois actes, Paris, 1747. Les Charlatans démasqués, ou Pluton vengeur de la Société de médecine, comédie ironique en trois actes, Paris et Genève, 1762. Cf. Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque National, Auteurs, tome 87, Paris, 1926, p. 578.

以上、外科医学会のことに関連して、不必要と思われるくらい、大学とサン・コームとの、内科医と外科医との、抗争に触れ、ケネーのみならずディドロやド・ラ・メトリのこの問題に関する著作まで紹介したのは、ケネーの「序言」が、専門の医師でない人たちまで抗争の渦中にまきこんだこの問題の重要性をじゅうぶん意識し、実践(験)から遊離した教条的な大学風の医学に対しての批判的観点を研ぎすまし、教条的な医学を排撃すると同時に、理論をないがしろにしていたずらに旧套に溺れている外科医に警告を発して、外科医学のあるべき姿を訴えたものであり、したがって

「序言」も『動物生理』そのものも、いわばこの抗争を背景としての所産であることを言いたかったからであるが、そればかりでなく、この抗争が、一般に生理学や解剖学に対してひとひとの関心を喚びおこし、ひいては生物学・自然誌に対しての興味をも側面から煽りたてることとなって、そのことが、フランスにおける唯物論および感覚論の樞頭の有力な素地の一つとなったと思われるいきさつを、示唆したかったためでもある。筆者は 1745 年にド・ラ・メトリの『魂の自然誌』(Histoire naturelle de l'âme)、翌 46 年にコンディヤクの『人間知識の起源に関する試論』(Essai sur l'origine des connaissances humaines)とディドロの『哲学的断想』(Pensées philosophiques)が出、47 年にはケネーの『動物生理』の第 2 巻、第 3 巻があらわれて、生理学をふまえての哲学的構想の醸成の経過が示めされたこの時期(さらに 48 年にはド・ラ・メトリの『人間機械』(L'Homme machine)、49 年にはディドロの『盲人書簡』(Lettre sur les aveugles)が刊行され、ビュフォンの大著『自然誌』(Histoire naturelle)の刊行が始まった)に、少なからぬ興味を寄せている。この段階では、感覚論も唯物論も、まだそれほどはっきりした性格をもつにいたらず、文字通り発酵の過程にあったということができるが、この時期はまた、30 年代から 40 年代にかけてのこの歴史的な抗争が、高潮に達していた時期とほぼ重なり合っている。言うまでもなく筆者は、感覚論・唯物論登場の共通の地盤としてのデカルトの自然観の伝統や、自然誌そのものに対しての一般の興味の湧起や、さらにはイギリスからのニュートニズムおよび経験論の影響等を、軽く見ているつもりは毛頭ない。しかしながらこの抗争は、フランス人の身边に起こった出来事であり、しかも右に挙げたコンディヤクの感覚論にしてもド・ラ・メトリおよびディドロの唯物論にしても、その発想において、多少の差はあれ、生理学や解剖学への、人間および動物における魂と身体の関係の問題への、関心が、物理学や生物学や自然誌に対してのそれとならんで、軽視することのできない役割を演じていることを思うだけに、この抗争の意義は、看過できないのではないかと考えているのである。なお自然誌に対しての当時の関心については、つぎの文献を参照。D. Mornet: Les sciences de la nature en France au 18^e siècle, un chapitre de l'histoire des idées, Paris, 1911.

(5) Préface aux Mémoires de l'Académie Royale de Chirurgie, tome 1, Oeuvres de Quesnay, pp. 721~738. 平田清明訳, 王立外科医学アカデミー紀要序文、『世界大思想全集』, 社会・宗教・科学思想篇 6, 所収。

(6) この点は『動物生理』の「序論」においても同様である。いわく、
「実験的理論 (théorie expérimentale) とは、理論に還元された経験そのものである。」Essai physique sur l'oeconomie animale, seconde édition, tome I, Paris, 1747, pp. LXXIX et seq

(7) 観察とは、身体の感覚しうる諸性質、病気の経過、その症状、手術の結果等を観察することであり、自然学的実験とは、身体の諸部分の構造と諸機能、人体の混合的組織 (mixtes) の組み立て、脈管を流れる流体の諸性質、食物の性質、薬物の作用等をあきらかにすることである。Oeuvres de Quesnay, p. 724. 前掲邦訳, 256 頁。

(8) Ibid. 邦訳, 256 頁。

(9) つぎの文献のうちにこの著作の内容の簡単な紹介がある。入沢達吉、医者としてのフランソア・ケネー、『中央公論』, 昭和11年2月号, 192頁。

「序言」における「哲学」がこのようなものであるとすると、それは『動物生理』第1巻の「序論」(Discours préliminaire) にあらわれた構想と、その本旨において、殆んど同じものであると言うことができる。(「序論」では理論の展開が一層組織だっており、且つ用語法などに若干の特徴があるにしても。) ただし筆者が利用することのできた第1巻の「序論」は、第2版所収のものであって、それが1736年の初版にそのまま載っていたかどうかは、初版を参照することのできない筆者にはたしかめられない。ただオンケンが、彼の編集にかかると『ケネー著作集』に収録した『動物生理』の1部の抜粋に付した注によると、初版には『医学における理論と実験』(Discours sur la théorie et l'expérience en médecine) という標題をもつところの、専門の生理学でない唯一の部分が序論となっており、しかもその部分の骨子が『紀要』の「序言」となり、さらにこの「序言」にもとづき第1版の序論が手直しされて、第2版の「序論」となったというのであるから⁽¹⁰⁾、第2版の「序論」と全く、またはほぼ同じ考えが、何らかの形で、初版に表明されていたことは推察にかたくない。だとすると、初版にはまだ、第2版の第3巻に見られるほどの哲学的な切りこみはあらわれていなかったと解しても、大して間ちがいはなさそうである⁽¹¹⁾。それはともかく初版における「医学における理論と実験」と

いう論稿は、初版に発表されるしばらく前、ケネーがリヨンのアカデミーに送ったものだといわれるが、『紀要』の「序言」は、この論稿の構想をふまえて、外科医の奮起を促がし、学会の意義を宣揚するための *papier de circonstance* としての性格をもたされたものだったのであろう。

(10) Oeuvres de Quesnay, pp. 740 et seq., notes (1) et (4) par Oncken.

(11) このようにして 1736 年から 1743 年にいたる間に、すなわち第 1 版の序論と「序言」との間に、構想のさしたる発展が跡づけられないとすると、いよいよ 1746 年に出たコンディヤクの『人間知識の起源に関する試論』の（もとよりそれのみではないとしても）ケネーにとっての意義を、考えないわけにはいかなくなるかも知れない。前掲拙稿，5～6 頁参照。

言うまでもなく「序論」も、「序言」とひとしく、「経験論的」態度によって貫ぬかれている。そこでは医学の理論に三つのものが区別されるが、その第一は各国各地方の旧套になずむ臨床医師の理論であり、その二は想像の所産である観念にもとづいて行なわれる推理の理論、仮定の体系であり、ケネーはこれを合理的理論 (*théorie rationnelle*) とも呼んでいる。その三が経験的知識から形成される経験的理論、真の理論、なのであるが、彼はこれと対比される合理的理論をまた *études scolastiques* (スコラ的の、というよりもむしろ大学ふうの研究) と名づけて、化学や解剖学から遊離した医学の權威を否定し⁽¹²⁾、ここでも暗に、医科大学側への対抗の意識を燃やしていると見ることできそうである。(この「序論」を含む第 1 巻が出た翌年、彼はサン・コームに迎えられた。) これだけの予備知識をふまえて、われわれは『動物生理』に展開された彼の構想の検討に入りたいが、参考のために、この著作の総目次 (*table général*) を掲げておくこととする⁽¹³⁾。

(12) Essai physique, tome I, pp. LX et seqq

(13) ただしこの総目次は、第 1 巻の巻頭に掲げられたものであって、著作の内容の概観には便利だが、細かくいうと、内容がこれと一致していないところがあり、また項目の表現や順序が実際の篇別と異なり、それにまた必ずしも各巻の目次に示めされた項目やその順序と等しくないことを、お断わりしておく。

TABLE GENERALE

		<i>Tome I</i>	
La Physiologie a pour objet —	Les principes des corps et leurs qualités	Constitutifs	{ La matière La forme
		Elémentaires	{ Le feu L'air L'eau La terre L'huile Le sel Le mercure
		<i>Tome II</i>	
	Parties intégrantes	Salines	{ Acides Alcalis Sels neutres
		Huileuses	{ Bitumineuses Végétales Animales
		Métalliques	
	<i>Tome III</i>		
	Les humeurs	Chyleuses	{ Le chyle Le lait La graisse
		Nourricières	{ Le sang & la lymphe La bile La mélancolie La pituite
		Récrémenteuses	{ Prolifiques Dissolvantes Lubrifiantes
Excrémenteuses			
Les parties			
	Les esprits		
	Végétatives	{ Génératrice Nutritive Expulsive	
		{ Les sensations Les perceptions Le discernement	

Les facultés—	Sensitives —	La mémoire
		L'imagination
		La pénétration
		La science
		Les inclinations
		L'instinct
		Les passions
		Le <i>Sensorium Commune</i>
		La conception
		La sagacité
		La prévention
		Le sommeil
	Intellectuelles —	Les perceptions intellectuelles
		Les idées
		La pensée
		La faculté imaginatrice
		Certitudes des connoissances
		Source des erreurs
		La volonté
		La raison
		L'attention
		La mémoire intellectuelle
		La reflection
		La conception intellectuelle
		La contemplation
		Le jugement
		L'argumentation
	Mixtes —	La liberté
		Le goût
		Le génie
Actions —		L'industrie
		La circulation
		L'action des vaisseaux
Tempéraments —		Les filtrations
		Sanguin
		Bilieux
		Mélancolique
		Pituiteux

2

ところでこの書に展開された動物生理学であるが、ケネーの伝記によると、その当時この書の成果を高く評価する向きもあった反面に、かなり手きびしい批判もあったことが知られる。ことに内科医の側から激しい攻撃の矢が放たれたことは、歴史的な抗争を背景としていただけに、むしろ当然のことだったであろう⁽¹⁾。しかしわれわれはその間にあって、オンケンが『ケネー著作集』に再録している『ゲッティンゲン学報』(Göttinger Gelehrte Anzeigen)の評者(オンケンはこれをハラー Albrecht von Haller と推定したが、今日ではこの評者が18世紀において実験生理学にモニュメンタルな業績を残したハラーであったことは、もう動かしがたい事実となっている)の、素人眼にもかなり公平と思われる評に、なかなか辛辣な調子が出ている点を、軽視してはならないと思う。ハラーは先ず、『学報』の1748年2月29日号に第1巻を、3月14日号に第2巻と第3巻とをとりあげており、その批判的紹介は、かなり詳細にわたっている⁽²⁾。もともとケネーは、この書において「生理学の理解のための序説」(un traité préliminaire pour l'intelligence de ce dernier [la physiologie])を与えようとしたものらしいが⁽³⁾、上掲の総目次にも見られるように、第1巻は元素論である。

(1) Cf. Hecht: op. cit., p. 228.

(2) Oeuvres de Quesnay, pp. 739~747.

(3) Ibid., p. 740. note (1) par Oncken.

ケネーはそこで伝統的な4元素に塩(sel)と脂肪(huile)と水銀(mercure)とを加えるが、この中で最も重要視されるのが「エーテル」(éther)と呼ばれる火性(feux)である⁽⁴⁾。ところでこの元素論は、アリストテレス風の、そしてスコラ哲学に継承された形相(forme)と質料⁽⁵⁾(matière)の問題から始まっている点からばかりでなく、筆者にはよくは判らぬながら、人体も、万物を形成する地(terre)水(eau)火(feux)空気(air)の4元素から構成せられ、しかもこれら

4 元素を相互に結びつけ、そしてそれらを活動させるものを精微にして宇宙に瀰漫する「エーテル」たる火性（プネウマ *pneuma*）と考えたヒポクラテス（Hippokrates）の医学——ヒポクラテスはこの「プネウマ」が呼吸によって大気中から体内に摂取され、心臓にその坐位を占め、そこから脈管に入り、体内の諸部に行きわたって、諸生命機能を支配し、なかんづく体液の分泌をいとなむところの諸器官の作用を調節すると考えたというが——こうした考えの伝統を趣うらしく見える点からも、おそろしく古めかしい感じを与えずにはいないであろう。さらにケネーが、ヒポクラテスの権威とともに、観察と実験こそが医学の真正の基礎であることを言い、人体の構造と機能とを知ることをもって不可欠のこととした実験生理学の祖ガレノス（Galenos）の権威を踏まえていることも、あきらかである。ガレノスは、ヒポクラテスによって説かれた4元素およびそれに照応する乾（*le sec*）湿（*le humide*）熱（*le chaud*）冷（*le froid*）の4性質、さらにこの両者と関連するところの体質のうちの主要部分たる血液（*sang*）粘液（*pitu-ite*）胆汁（*bile*）黒胆汁（*atrabile*）の4体液、そしてそれとつらなる人間の四つの気質、多血質（*sanguin*）粘液質（*phlegmatique*）胆汁質（*bilair*）黒胆汁質（*atrabilaire*）、の説を継承し、これらの諸元素、諸体質を組み合わせることで生体の生命現象をつかさどるところの「プネウマ」ないし「スピリトゥス」（*spiritus*）の説を発展させた人と言われる⁽⁶⁾。じじつケネーはその「序論」で、ヒポクラテスとガレノスと、そしてオランダのブールハーフェ（Hermann Boerhaave）を、医学における最高の権威に数えているのである⁽⁷⁾。

（4）この点第1版と第2版とでは、本質的な相違のあることを、オンケン注記している。すなわち第1版では、元素の数は水銀を除いた六個であり、しかもこのうち火と空気が能動的原理、他のものは受動的原理とされていたらしい。しかるに第2版になると、元素の数がひとつ増えたばかりでなく、能動的原理は火のみとなるからである。「七つの元素のうち、混合的組織のうちにはたらくすべての運動の本源的原因であるところのものは一つ、即ち火または「エーテル」である。つねに身体のうちにはたらくこの原理は、他の元素のように、身体を構成するものではない。他の元

素は身体の素材 (matériaux) であり、定着し、一緒になって身体を形成するのである。これらの元素が混合的組織を構成するに当たって用いられる方法に、二た通りある。というのは、それらは身体を構成する素材となる他に、なお、それらが自由の状態にあり、「エーテル」即ち火によって動かされるときには、本源的原因が混合的組織に一切の変化をひき起こす道具 (instrument) ともなるからである。それゆえに火は、唯一の能動的元素なのであって、他の原理は、もっぱら受動的元素とのみ見ることができる。なぜならこれらのものは、火によってのみ活動するからであり、火は、それらのものに絶えずはたらきかけ、それらのものを活動させるものだからである。これらの受動的元素のうちには、自然の普遍的かつ本源的な道具と認めなくてはならぬものがある。それは空気と水とである。その他のものは特殊的・附帯的な道具とのみ見ることができるが、なかんづく塩と脂肪と土とがそれである。なぜというにそれらは、空気と水とを媒介としてのみ、活動するからである。」*Essai physique*, tome I, pp. 35, 36. この箇所はオンケンが、『ケネー著作集』に再録している。Oeuvres de Quésnay. p. 724, note (6) par Oncken.

(5) アリストテレス哲学における「形相」と「質料」の関係は、後者が事物の形成の基礎となり、事物がそれから形成されることの基体意味するのに対して、前者があらゆる事物に内在するその形成の原理をあらわすところにある。したがって「形相」は、「質料」から離れてはその意味を失なう。それゆえ「形相」とは、たとえばカント哲学における「形式」のように、現象の多様を超越することによってこれを秩序づけ、または構成するはたらきを指したりするのではなく、いわば「質料」に内在してそれを形成にみちびき、現実化するところのものなのであり、あるいは「質料」を形成することによって、それに内在する目的を実現するはたらきをいうのである。(「形相」のもつこの目的論的性格には注意を要する。)したがってこの両者の関係は、「質料」が「形相」の可能態であるのに対して、「形相」は「質料」の現実態であるということにもなる。Cf. Aristoteles: *Metaphysica*, with an English Translation by H. Tredennick, Loeb Classical Library, 1933, Books VII~IX. (なお、藤井義夫, アリストテレス, 思想学説全書, を参照。)ところで生体の場合には、魂がその形相、身体がその質料ということになり、魂が生命の原理とされる。そしてここでも、魂はその形相的活動によって目的を実現するものであり、身体はそのための道具であるという関係が成り立つのでなくてはならない。というよりも、自然的物体の諸部分が一定の秩序において組み立てられ、互いに

作用し合って、そのものの生成を内的に規定する自然的本質 (physis) の実現に道具として役立つ場合が生体であり、有機体であるのであるが、このような道具としての諸部分こそが、勝義における「器官」(organ) と呼ばれるものなのである。身体とはまさしく、かかる「器官」の組み立て (organisation) に他ならない。アリストテレスはかような身体に対して、その形相たる魂をば、「生をそのうちに可能態としてもつ自然の物体の形相」であり、第一次の現実態であると定義する。Id.: De Anima. with an English Translation by W. S. Hett, Loeb Classical Library, 1957, Book II. 高橋長太郎訳、心理学 I, 56~57 頁。

こうした生体観が、アラブの注釈家たちに手直しされて、スコラの自然哲学に伝承された。いわく——生物は形相と質料との結合であるが、それぞれの実体的形相 (forme substantielle) には、若干の基本的性質が属する。たとえば解の木は、いくらかの質料に解の実体的形相が結びついたものだが、この形相のうちには、あらゆる樹木の生長機能 (propriété végétative) の他に、解特有の性質が含まれる。同様に獅子犬 (chien griffon) の場合も、若干の質料に獅子犬の実体的形相が結びついたものだが、この形相のうちには、生長機能と感覚機能 (puissance sensitive) と、そして獅子犬特有の性質が含まれる——といった工合である。Cf. A. Cresson: Les courants de la pensée philosophique française, tome 1, Paris, 1927, p. 15. たしかにこうした解釈は、アリストテレス哲学の「死せる形骸」にはちがいがなかったが、たとえば形骸化したかかる「実体的形相」の概念に、ライブニッツが、その意図はさておき、新しい意味を吹きこもうとしたことは興味がある。すなわち彼は——なるほど私は、これら形相の考察が、自然学の詳細な問題においては何の役にも立たず、個々の現象の説明に用いるべきでないという点では、現代の学者と同じ意見である。この点で、スコラ哲学者は間ちがっていた。その例に倣って以前の医者たちが、人体の性質を論じる際に、その作用を検査する労を執らず、形相だとか性質だとかを言い立てて説明がついたと思っていたのは、ちょうど時計にはその形相から出てくる時計性 (qualité horodictique) があるというだけで、その時計性というものがいかなるものから成り立つかを、考えずに済ませておくようなものである。……しかしかように実体的形相が誤用され、悪用されたからといって、われわれは形而上学において、どうしても知っていなくてはならない一事を放棄すべきではない——と述べて、個体としての実体の同一性を確立するために、この実体的形相もしくはスコラ風の「魂」の考えを、復活させようとした。G. W. Leibniz:

Discours de métaphysique, texte et commentaire. par P. Burgelin, Paris, 1959, p. 27 et commentaire par Burgelin, paragraphes X, XI. XII. 河野与一訳、形而上学叙説、23 頁。ライプニッツのこのような解釈は、実体的形相を個体性の原理 (haecceitas) と考えるスコラ哲学末期のドゥンス・スコトゥスや唯名論者の考えなどと、いくらかつながるところがありそうだが (Cf. Vocabulaire technique et critique de la philosophie, publié par A. Laland, Paris, 1956⁷, p. 1053), こうした形相の考えの唯名論的展開が、個体性や具体性への執着を通じ、或る意味で、後の唯物論や感覚論への地均らしをしたらしいいきさつは、われわれの興味をそそらずにはいない。Cf. F. A. Lange: Geschichte des Materialismus und Kritik seiner Bedeutung in der Gegenwart, Leipzig, 1921¹⁰. 1. Buch. II. Abschnitt, II. Die Scholastik und die Herrschaft der aristotelischen Begriffe von Stoff und Form. なおケネーが「形相」と「質料」の考えを、じかにアリストテレスの原典から受けとったとは考えられないが、彼にあっても、「形相」が目的論的に捉えられている点を記憶しておこう。なお次節注(2)を参照。

(6) 永井潜, 哲学より見たる医学発達史, を参照。なおつぎの文献は簡潔な叙述であるがよい参考になる。沢瀉久敬, 心と身体に関する考え方の歴史, 精神身体医学講座 1, 所収。

(7) Essai physique, tome I, p. LVI. なお伝統的な4元素説は, 18世紀の後半あたりまで影響力をもっていたらしい。たとえば Cf. [D'Holbach]: System de la nature, Londres, 1770, première partie, chap. III. またド・ラ・メトリなども, 寒・熱をもって物質の原動形相 (formes motrices) と考えていた。J. O. de la Mettrie: op. cit., chap. V.

も っ と も ヒポクラテスやガレノスの権威を踏まえているとはいっても, そのことはケネーが, 彼らの教説をそのまま鵜呑みにしていたということではない。じじつ彼らの教説も, その後の生理学の発展によって, かなりの修正をうけ, 変革を蒙っている。たとえばわれわれは, ヒポクラテス・ガレノスの「プネウマ」説も, ハーヴェー (William Harvey) の「血液循環の理説」⁽⁸⁾の確立後は, しだいにその権威を喪失したことを教えられるが, ケネーも, ガレノスの所説を根本的にあらためたハーヴェーを, 上述の医学の3権威に匹敵する権威と見なしていた事情は, 『紀要』の「序言」にあきらかである⁽⁹⁾。それどこ

ろかハーヴェーの理説は、ケネーの思想（ただ医学・生理学だけのことではない）に、基本的な影響をおよぼしてさえいるということが出来る。それにもかかわらずなお、ケネーが「エーテル」を生命原理と考えており、したがってそこに「プネウマ」説の痕跡を残している点が問題となるであろう。（もっとも 18 世紀の生理学には、いろいろな形でこうした「プネウマ」説の痕跡が残っていたらしい⁽¹⁰⁾。ラヴォワジエにより、体熱が酸素の燃焼によって説明されるにいたるまでは。）それはともかく、ハラーの評のうちで特にわれわれの注意を惹くのは、彼がケネーの説くところをいちいち吟味しながら、いったい著者は、「その序論であれほど力をこめて述べたことを、すなわち証明されないことを決して受け容れるべきでないということを、もう忘れてしまったのだろうか⁽¹¹⁾」と書いているくだりである。この点は、ケネーの生理学の根本的性格と関連する問題だといわなくてはなるまい。

(8) William Harvey: *Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus*, Frankfurt am Main, 1628. 峠峻義等訳、血液循環の原理、岩波文庫。ハーヴェーの輝やかしい業績は、ガレノス以来の旧説を裂えして、血液循環の理説を確立した点にあるといわれる。ガレノスにあっては、肝臓でつくられて心臓の右心室に送られ、そこで浄化された血液が、肺臓から左心室に入った「プネウマ」と左右心室隔壁の小孔を通じて混合し、それから静脈管を通じて身体の各部に送られ、そこで消費されると考えられた。が、すでにハーヴェーの先駆者によって、隔壁に小孔のないことなどが確かめられたこともあって、彼はガレノスの説に不審をいだき、ことに静脈管によって身体の各部に送られるという血液が、そこで消費しつくされるには余りにもその量の多いことを、定量計算によって確定し、旧説を裂えす足がかりをつくった。かようにして彼は苦心の末、心臓の機能を能動的にとらえ、その力づよい伸縮によって血液が動脈管におし出され、それが身体の各部に行きわたって後、静脈管によって心臓に還流し、かくて止むことのない循環をくりかえすいきさつを示めし、心臓を中心として行なわれる肺循環・大循環の経路を、一つの循環体系としてあきらかにすることに成功したのである。永井、前掲書、270 頁以下参照。

(9) *Oeuvres de Quesnay*, p. 726.

(10) たとえば 18 世紀後半における「フロギストン」説。「フロギストン」(phlogiston) とは、物質の中に含まれる可燃素をいうのであるが、

呼吸によって摂取された「フロギストン」が、血液中から放出されて体温をつくるものと考えられた。永井、前掲書、345頁。ドルバックも、「フロジスティク」(phlogistique)をもって、生命原理と考えている。(D'Holbach): op. cit., p. 125. なお哲学史上における「フロギストン」説の意義については、次の文献を見よ。E. Cassirer: *Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit*, 2. Bd., Berlin, 1922, S. 434. Walter Frost: *Bacon und die Naturphilosophie*, München, 1927, S. 212.

(11) *Oeuvres de Quesnay*, p. 743.

第2巻では植・動・鉱物界における塩と脂肪とがとりあつかわれ、その一部に生理学が、すなわち血液や他の体液中に含まれる塩と脂肪とがとりあげられる。ハラーはこの第2巻を指して、それは紛れもない化学、言うなれば化学の一部に他ならないが、そして著者は、こうした化学を知ることなしに生理学を書くことは不可能だとはじめから言いはするが、それならば、解剖学をおろそかにしてどうして生理学を書きうるのかと反問し、ここでも『動物生理』の内容が、その「序論」の趣旨に忠実でない点を衝くのである。第3巻には各種の体液(humeurs)と身体的および精神的諸機能がとりあげられる。ハラーは先ず、そこでの分類が普通のものと違って、昔の人の古い分類を想起させると語っているが、問題はただ分類上のことだけでなく、たとえば血液を構成する四つの主成分の説なども、それが古人のものだということで受け容れられていることに、異議を挟さむのである。なるほどそれは、古説のままではないかも知れない。しかしケネーは、この点を説くに当たって、水と蛋白質と脂肪とを数えるほか、これという理由も示めさずに、血液の中に胆汁性の液体(suc bilieux)を認める。それはつまり、卵白のごとく、冷気に遭って凝結する血液部分なのであるが、彼はこれをもって、昔から問題になっている黒胆汁に置き換えるという形をとるのである。

さらに血球は赤色でないなどと言ったりしているが、このような点でのケネーの観察が、はなはだ大ざっぱで不十分なことを指摘する。そればかりか、血液のその他の性質についてケネーが述べていること

は、その大部分がブールハーフェもしくはその解説者からの借用だと言う。(第1巻に関する評の中でも、或る個所について、同じブールハーフェの化学からの借用を問題としているところがある。) しかもハラーは、ケネーがその際、「彼の大へん悪い癖なのだが」、ブールハーフェの名を「いっさい挙げていない」ことを、難じているように見えるのである⁽¹²⁾。このことは、ブールハーフェの弟子であったハラーにして見れば、無理のない詰問だったのであろう⁽¹³⁾。

(12) Oeuvres de Quesnay, p. 744.

(13) ブールハーフェは、17世紀の後半から18世紀の最初の3分の1期にかけて、ヨーロッパにおける医学・生理学の巨星であった。「医化学派」(iatrochimistes)と「医理学派」(iatromécanistes)の説くところを参酌して、従来の学説を体系化し、とくにつよくハーヴェーの循環の原理の影響を受けた人といわれる。ケネーもハーヴェーの理説を、ブールハーフェを通じて受けとったのかも知れないのである。彼の教説をフランスに伝えた点で、ハラーと等しく彼の弟子だったド・ラ・メトリの功績は大きかったらしい。彼には《Aphorismes》をはじめとして、ブールハーフェの著作の仏訳が7種ある。こうした点からであろうド・ラ・メトリは、一方にケネーの権威を認めながらも⁽¹⁴⁾、ケネーに対して、あるいはハラー以上とも見える辛疎さを示めた。すなわちド・ラ・メトリは、或る医者がケネー(Qualisnassus)の『動物生理』について、それは「きれぎれにされたブールハーフェであり、フランス風の衣裳をつけたブールハーフェ自身の教説である」と言った言葉を引用しながら、「マント市であればと慕われており、ブールハーフェ以上に偉大なわがQualisnassus) くらい、偉大なブールハーフェの動物生理をよく理解している医師が、パリにたくさんいるだろうか」という揶揄の言葉を投げつけているからである。Cf. Hecht: op. cit., p. 228.

(14) ド・ラ・メトリはその『魂の自然誌』(1745年)の中で、ケネーを練達の士と呼び、身体形成において基本的な役割を演じる「エーテル」をとりあつかった『火論』(Traité du feu)を挙げているが(J. O. de la Mettrie: op. cit., chap. VIII), ケネーにはこのような表題をもった著作はない。おそらく『動物生理』の初版のなかの「火論」のことと考えられる。Cf. Essai physique, tome III, p. 158.

ケネーの伝記作者は一般に、ケネーに同情的である。たとえばエク

ト女史は、ハラーの評に不満らしく、正当な評価は、これをデュモンシヨールの『医学書誌』(Dumoncheaux: Bibliographie médicale raisonnée, 1756) の出現に俟たなくてはならなかったと書いているが⁽¹⁵⁾、ありようは、シュッテルがケネーの医学にかんする著作の大部分について述べているようなものだったのかも知れない。すなわち「事実問題として、ケネーの医学上の著作の大多数は、二つの極の上に安らっていた。その一つの極とは、ブールハーフェの医理学的な循環の体系であり、他の極は、古い伝統にぞくする説明と分類の過剰⁽¹⁶⁾」ということである。しかしデュモンシヨールのものはともかくとして、専門の医学史書の中にも、彼の業績を高く評価しているものはあるらしい。筆者の寓目した文献の一つは、血液の化学的分析を行なったこと、および淋巴系に関して淋巴腺の構造と生理作用とを追求したことを中心として、彼の業績を伝えているのである⁽¹⁷⁾。じじつ素人眼にも、彼の業績には、医理学的な解釈とからんで、とくに『動物生理』の第2巻などでは、医化学的な方向がうまく出ているのではないかと考えられ、彼が外科医学校の薬学構座の教授の辞令をうけたことなどが思いあわさるのであるが、そのようなことは、しかしながら、ここでは直接の問題にならない。われわれがこの節で、不当と思われるくらいハラーの評にこだわったのは、じつはケネーの哲学そのものが、彼の動物生理の構想と密接な関連をもつからなのであり、それにハラーの批評が、ただ生理学に関するだけのものというよりは、哲学に関してのケネーの発想の特徴にも、関連するのではないかと思われたからなのである。

(15) Hecht: op. cit., p. 237.

(16) Jean Sutter: Quesnay et la médecine, 《Quesnay et la Physocratie》, I, p. 203. しかしブールハーフェに対しても、一途にその教説に盲従していたわけではない。われわれはケネーが、たとえば体液の分解(coction)に関して、かなり厳しくブールハーフェを非難していることを知っているが(Essai physique, tome III, pp. 431 et seqq.), シュッテル自身も、ケネーが同時に批判的でもあったことを指摘しているのである。Ibid., p. 206.

(17) 永井, 前掲書, 349 頁.

3

ところで第3巻における「生理」の構想と密着したケネーの哲学は、体液および身体の固形部分をとりあつかった諸章にひきつづき、第13章以降に展開されるが、先ず生命原理 (*principe vital*)、すなわち身体の諸部分に生命と運動と感性 (*sensibilité*) とを与える本源的な物質的動因 (*agent matériel*) を問題とするこの章で、この原理がどう規定されているかを見ることから始めよう。ケネーは差し当たり、この第1原理が、神経を棲家とすることは経験によってあきらかだという。そして殆んどすべての学者 (*physicien*) は、この原理が神経組織を構成する小さな脉管または微細な神経網の中に含まれる・非常に稀薄ではあるけれどもいたって活動的な流体 (*fluide*) のうちにあると見ていることを語る。もっともこの流体は、眼に見えないものであるところから、学者のうちには、かかる流体の存在を否定し、外部の客体が身体の器官に接触することによって起こる神経の振動だけで、身体 of 諸部分の運動や感情を惹き起こすに充分と考えている向きもある。彼らは神経を張り切った綱のように見ているわけであるから、外部の客体がちょっとでもそれに触れると、振動が起こると考えるわけである。(Essai physique, tome III, p. 104.) しかしケネーはこの説を採らず、脳から神経を通じて身体の各部に流れる流体の存在と、この流体がこれらの部分に生命と感性とを与えることを、信じて疑がわなかったものようである。

しかしながら、生命原理を宿すこの眼に見えない流体とは、いったい何なのか。ここでケネーは諸家の考えを例示するが、そのいずれにも納得できないらしい。だとするとこの流体、すなわち生命の精気 (*esprit vital*) の性質は、的確には判らないというより他に言いようのないことになる。性質が不明であるばかりでなく、それが体液のうちから供給されるのか、それともわれわれの周囲にある何らかの物質が体内に入りこみ、それが神経管に導入されるのかということすら不明である (p. 107)。だがそのいずれにしてもこの「生命の精気」は、

われわれの身体にあらゆる運動を喚び起こすに当たって、単純なきっかけ (cause simplement déterminante) しか必要としないほどの活動力を、それ自体にもつものでなくてはならないと言う (p. 108). なるほど筋肉にも、身体の諸部分を動かす力はある。この力は筋肉の繊維の中を絶えず流れる血液が、筋肉に伝達するものなのであり、この繊維の中の血液の流れが、渋滞したり阻止されたりするやいなや、筋肉は収縮する。それによって運動が起きる。けれども、血液の循環が渋滞したり阻止されたりすること自体が、じつは本源的な力に依存するものであることを知らなくてはならない。この本源的な力の棲家が、神経組織だということである。ただこの力が、この組織を流れる或る種の流体にもともと属するものとすべきなのか、ないしは何らかの原因によって、この流体に外から与えられるものと考えべきなのか、不明だということになるのである。

右のごとくこの本源的な力、本源的な動因 (agent primitif) を含む流体の性質は不明であるけれども、この活動力と流動性とを有する流体は、その力のすべて、その活動力のすべてを、じつは「エーテル」から獲得するのでなければならぬというのがケネーの論旨であり、かくて論述を前節に触れた元素論につなげてゆくらしい (p. 110). しかし注意を要するのは、この流体が、「エーテル」そのものだということではないらしい点である。なぜならケネーは、いろいろの観察からして、この流体のうちには、「エーテル」はもとより、地、水、空気、脂肪等の諸元素の他、酸なども含まれているにちがいないと説いているからである。それはともかく、これら諸元素の複合体であるこの流体こそ、「動物精気」(esprits animaux) の名の下に知られている当のものだと指摘する (p. 112). ここにデカルトの著作を通じてひとびとの親炙している「動物精気⁽¹⁾」の問題が登場するのであるが、この精気の測り知れぬ活動力の根源こそ、問題の「エーテル」だというのが、ケネーの基本的見解のようである。

(1) デカルトにおいては、「動物精気」とは、心臓の中で精蒸された血液の部分であり、「きわめて微細な気流、というよりもきわめて純粹できわ

めて強烈な焔のようなものであり、絶え間なく多量に心臓から脳へと昇ってゆき、そこから神経を通して筋肉のうちに浸みわたり、身体のある部分に運動を与える」ものなのである。Descartes: *Discours de la méthode, Oeuvres choisies avec un avant-propos et des notes de L. Dimier, Classiques Garnier, 1950, tome premier, p. 47.* 落合太郎訳, 方法叙説, 哲学双書, 100 頁。この考えは、スコラ其自然学そのままではないにしても、それからの伝承であることをジルソンは附言している。Cf. Id.: *Discours de la méthode, texte et commentaire par E. Gilson, Paris, 1947, p. 414.* 言うまでもなく「動物精気」の考えは、今日の生理学では一片の虚妄としての意味しかもたないらしいが、デカルトは真面目にそれを血液の精蒸部分と考えた。ケネーは上に見た通り、それを仮定しながらも、その性質なり由来なりが不明であることを率直に語っている。しかるにド・ラ・メトリになると、それはいたって微細な物質であるが、たくさんの実験や確かな推理によって、その存在はじゅうぶん証明できると言っているのである。De la Mettrie, op. cit., chap. IX.

このように生命の根源である物質的原理をとりあつかった後、ケネーは第14章以下において、身体諸部分の諸能力 (facultés) の吟味に入るのである。ここで彼は、古来多くの哲学者が、身体諸器官の運動をあやつる原動力たる「魂」を、物質そのものに帰したことをとりあげつつ、とくにスコラ哲学者たちが、生体について種々の「魂」を、すなわち種々の「実体的形相」を区別したことに触れ、彼自身も諸能力の吟味に当たっては、だいたいこの区別を踏襲するらしく見えるのである。スコラ学者にとっては、先ず《*âme végétative*》とは、植物の有する營養・生長・生殖の能力を意味していた。動物もちろん、これらの能力を植物と同じくもつが、動物はそれ以上に、感覚し、知覚し、回想する能力を有し、情念をもつ。それゆえ彼らは動物に対し、《*âme végétative*》ばかりでなく、《*âme sensitive*》を同時に認めた。しかるに人間は、これら二つのものの他に、なお、推理の能力、すなわち客体の性質を探求し、観念を析出し、判断をする能力をもっている。ゆえに彼らは人間に対して、さらに非物質的な《*âme raisonnable*》を帰したのである⁽²⁾ (p. 118).

(2) スコラ哲学における《*âme végétative*》,《*âme sensitive*》および《*âme raisonnable*》の区別も, アリストテレスから出ている。前節注(5)に触れたように, アリストテレスにおいては, 生体の形相すなわち生命原理は,「魂」である。ところが彼においては, 生命というのは營養・生長・生殖・死滅の機能だけでなく, 感覚のそれ, 思惟のそれをも包含する。もちろん營養・生長・生殖の機能しかもたない植物的生は, 生命の原始的な段階であり, 動物的生はそれに感覚能力の附け加わったもの, さらに人間の生は, 動物的生に思惟の能力の加わったものであって, この最後の能力には特別の意味が附せられるが, それと同時にその反面, 思惟の能力はそのうちに可能態として感覚能力を含み, また感覚能力もそのうちに可能態として營養能力を含むという関係がある。しかしそれはとにかくとして, 彼においては, 心理学と生理学とがはっきり区別されていないと言われるように, そこには「魂」(プシュケ *psyche*) というものの独特な捉え方があることに注意を要すると思われる。いずれにしても「魂」が, 生命をそのうちに可能態としてもつ自然的物体の第一次の現実態と定義される場合, ここにいう物体とは,「器官」を具えているところの物体, いなむしろ「器官」の組み立てであるところの生体・有機体を意味する事情を銘記しておこう。ケネーにおいてばかりでなく, この時代の感覚論・唯物論の風潮の中で重要な意味をもつ《*organisation naturelle*》という概念も, これを生理学の地盤から言うならば, 身体を構成し, その活動を支えるところの諸部分(諸器官)の配合のことであり, 諸器官が特定の機能を演じ, 特定の目的に添うように組み立てられた配合の仕方を指すのである。(前節の注(5)を参照。)

われわれは前節において, ケネーがスコラ哲学風の形相と質料の考えを踏襲する点からしても, またヒポクラテス・ガレノス医学の伝統を趨うらしく見える点からも, 彼の生理学から, その「序論」などから受ける印象とはちがって, はなはだ時代がかった古めかしい感じをうけたが, このことは, 第3巻に展開された「生理」の哲学にも, 同じく当てはまりそうに見える。周知のごとくデカルトは, アリストテレスおよびスコラ哲学風の《*âme végétative*》,《*âme sensitive*》および《*âme raisonnable*》を連続的に考える考え方を却けて, 精神と物質との二元論の立場を貫ぬこうとした。デカルトにとっては, 精神と物質とは峻別せらるべきものであり, したがって「魂」が生命原理を

意味するかぎりにおいては、それはどこまでも、物質の世界に属するものとされなくてはならなかった。なるほど彼も時として、《*âme végétante*》（生長機能）などという表現を使ったりするが、しかし彼にとってそのようなものは、《*âme sensitive*》だとか、とりわけ《*âme raisonnable*》だとかとはちがって、ほんらい「魂」と言われるべき筋合いのものではなかったのである。それゆえケネーが——カルテジアンは《*âme sensitive*》と《*âme raisonnable*》とを一しょにして、これを人間にのみ認めた。なるほど動物も感覚し、知覚し、回想し、識別し、意欲や情念をもつかに見えるけれども、こうした外見上の能力は、実をいうと、純粋に機械的な作用にすぎないと彼らは考えたからなのだ——と言って、かかる解釈に不服を示めし、経験からして、動物にも感覚機能を認めざるをえない点を強調し、デカルト的な構想をもって、経験に反する憶測にすぎないことを指摘する⁽³⁾とともに、カルテジアンが人間的存在についても、身体の原理を純粋に機械的にとらえる機械論をとることにあきたらないらしいことが、ここでの問題になる。事実においてケネーは、デカルトからさらに後退して、デカルトの却けたスコラ的な伝統に、まったく拘泥していたと見らるべきなのであろうか (p. 118)。

(3) この点に関してのデカルト批判は、むしろこの時代の一般的風潮だったと見ることができる。デカルトを非難しながらも、しかも他面デカルト主義者をもって自任していたド・ラ・メトリすら、この点についてのデカルト批判は、なかなか痛烈である。「越えがたい困難を克服しようとして、彼ら（カルテジアン）は迷宮のうちに踏みこんだ。動物は純粋な機械だなどというバカげたことを言いたてて、この迷宮から脱出できると思ひこんでいたのだから笑止千万だ。」Id.: op. cit., chap. VI.

まさしくデカルトにあっては、身体は物質である。そしてそれは機械である。身体の諸部分に運動を与え、あらゆる情念すら惹き起こす「動物精気」も、血液の精蒸部分であり、「きわめて純粋できわめて強烈な、焰のような」微粒子である。そしてこの精気は、「エスプリ」というその名にもかかわらず、精神との関係を、はっきりと絶ち切られているのである。このようにデカルトおよびその学派は、動物に精

神を、すなわち理性機能と感覚機能とを拒否するとともに、一般に生体と無生物との差を認めようとしない。それらを等しく機械論的に把握しようとする。いわく、身体の「運動も、時計の運動が、その平行錘やその歯車の力、位置ならびに形状から結果するのと同じように、心臓において目撃できる諸器官の配合、あるいはそこに指で感じえられる熱、および経験によって知られうる血液の性状、これらのものから必然的に結果するのである⁽⁴⁾」と。

(4) Descartes: Discours de la méthode, Oeuvres choisies, tome premier, p. 44. 前掲邦訳, 93 頁。

しかしながらケネーも、こうした機械論を全面的に否定するわけでは決してない。それどころか、第 15 章中生殖能力をとりあつかう項などでは、このような把握の線を、かなり徹底的にうち出している。言いけらく、身体の根源的もしくは本源的形相は、流体の部分に求めらるべきであるよりも、むしろ、その固形部分 (partie solide) にあると言わなくてはならないが、じじつ身体の限定力 (puissance déterminante) またはその物質的運営能力の一切は、原則として、これら固形部分の組み立て (organisation) に依存するのである、と。もとよりこの組み立ては、神の英知によって秩序づけられ、定められることを言うが、しかしその組み立てと運営とが機械的に、単純にして不易かつ一様な一般法則に従って行なわれることを指摘している点に、注意しなくてはならない (p. 140)。すなわちここでは、諸器官の組成が造物主の英知によるものでありながら、そのこと自体およびその運動が、機械的な一般法則にしたがうというのである。同様の説明をしている別の個所では、これら諸器官に活力を与え、それを運動させるところのものが、生命原理であることを言いつつ、そこでもその説述の仕方は機械論的である。いわく、動物生理の諸機能がいとなまれる道具または手段としての原因 (cause instrumentale) であるところの諸器官は、まったく機械的にはたらくのであって、それらは専ら諸部分の組み立てに依存するとともに、それらに活力をあたえる生命原理に依存するのである、と。しかしこの場合にあって、この物質的

理の奥にあってそれをはたらかせる第1原因こそは、これら諸器官の活動を終局においてあやつる神の英知なのだという点をほのめかすのであって (p. 116), その把握はたしかにマルブランシュを彷彿させる。しかし機械論的な説明は、右に例示した 1, 2 の個所にとどまらず、全巻を通じてかなり特徴的であるということが出来る。それゆえ実質的には、ケネーの生理観は、デカルトのそれからそれほどの隔たりをもたないと見ることも、或いは可能なのかも知れないのである。

じじつデカルトも、神が身体をつくるに際して、その心臓のうちに「光のない火」を焚きつけておいた⁽⁵⁾と述べたりして、とくにケネーにおける「エーテル」説ほどの仮定を樹てたりはしていないにしろ、陰に「ブネウマ」説の痕跡らしいものをとどめているし、またケネーにしてからが、生体の機械論的説明を下だすに当たって、生体と作品とを同様にとりあつかい、時計の例をもち出したりするばかりでなく (p. 406), 器官の組成を機械に、生命原理としての「エーテル」を機械をあやつる工匠に擬したりしているのである (pp. 141~142)。まさしく両者の差は、人間と生物および無生物との差別にこだわるかこだわらないかの相対的な姿勢のちがいに、かかわるだけだとも考えられそうである。(じじつはこの点がはなはだ重大なのだが。) ケネーにおける動物生理の構想が、デカルトの機械論的な生理学を継承するものだという評価は、その当時からあったらしいが、シュッテルなども、ケネーのそれを、デカルトからクロード・ベルナール (Claude Bernard) への発展の線の上に位置づけようとしている⁽⁶⁾。もちろんこの位置づけは、大づかみな発展の傾向という点から見ると、おそらく真実に近いのであろう。にもかかわらず『動物生理』を仔細に点検してみると、ただこの線の上にあるといっただけでは、やはりその構想の性格を正確にとらえることには、必らずしもならないのではないかという気がしてならない。

(5) Id.: op. cit., p. 40. 邦訳, 87 頁。

(6) Sutter: op. cit., pp. 208~209. クロード・ベルナールは、19 世紀において赫々たる名声を馳せた実験医学の確立者である。彼によると、生

体はその構成要素の物理的・化学的特質によって必然的にはたらく機械でありながら、しかも彼は他面、生体・有機体の諸器官には、生体のかくのごとき活動 (fonctionnement) から独立したものと考えらるべき面があり、器官は、科学の範囲を超える原因の支配を受けるものとした。というのは、動物と機械とを比べて見ると、生体の諸器官は、機関車 (locomotive) の単なる桿 (bielles) などとは異なり、生体のはたらきが限度に來ても、そこに新しい神秘的な・英知的な活動を喚びおこし、生体の活動の消耗を補ない、生体のメカニズムを保全したりすることができるからだ、と説いた。F. Le Dantec: *Physiologie*, 《De la méthode dans les sciences》, première série. Nouvelle Collection Scientifique, directeur: Emile Borel, Paris, 1920'', pp. 225~226. 沢瀉, 前掲稿, 28 頁。

このように、ケネーはかなり果敢に機械論を受けいれながらも、同時に、そうしたからくりの奥にあってそれを統べている第1原因としての神の英知, 至高の存在を指示することを止めない。かりに生体のはたらきが一個の時計に擬せられるにしても、あるいは擬せられるからこそ、時計の場合と同じく、生体についても、その製作者 (auteur) が予想されるのでなくてはならないと考える (pp. 121~122)。われわれはこうした見解が、マルブランシュのそれから糸をひいていることを知っているが、しかしデカルトも、上述のように、この点ではそれほど逕庭を示めしていない。それどころかマルブランシュの見解は、デカルトのこの点についての見解の敷衍と見るのが、むしろ穏当なのであろう。たとえばデカルトはその『叙説』でこう語っている。「各動物の体内にある骨、筋肉、神経、動脈、静脈、およびその他すべての部分のおびただしい数に比べるなら、きわめて僅かな材料しか使わずに、どれほど多くの種々雑多な自動体 (automates) を、あるいは動く機械を、人間の技能はつくりださうかを知るがゆえに、神の手によってつくられ、比類のない秩序を与えられたところの、そうして人間の発明しういかなる運動にもまさって驚嘆すべき運動をうちにもつところの、一つの機械としてこの身体を眺めるひとびとにとっては、このこと (身体の生理) は、いささかも不思議に思われまいであろう⁽⁷⁾」と。まことにデカルトは、造物主による器官の組み立ての、配

合の、構造の、機能の、精妙を、随所に語っているのである。

(7) Descartes: op. cit., p. 49. 邦訳, 102~103 頁.

それならばケネーとデカルトとの生理観についての差異は、いったいどこにもとめらるべきなのであろうか。たとえばケネーは胃の消化機能を説くに当たって、こう述べている。胃は摂取した食物を消化し、乳糜様のものとしてそれを腸に送り出す。胃が健全であれば、充分消化した後にこの送り出し (expulsion) が行なわれる。ところで不消化のままに送り出しが行なわれたりしないのは、どんな事由があつてのことであらうか。送り出しの時期を胃にサインするのは、いったい何だろうか。もとよりこの機能がはたらきだすのは、身体の諸器官が相互関連的に、何らかの刺激によって動くからなのであるが、そればかりではない。その他に消化された食物が胃の腑に特別な刺激を与えることと、そうしてこの内臓が、ある程度の感性⁽⁸⁾ (sensibilité, ドルバック流の表現を使うなら sensibilité physique) をもつからなのだと考えなくてはならない、と (pp. 120~121)。かかる感性のはたらきは、おそらく、われわれの意識には登らぬものなのであろうが、胃の腑にながしかの感性を認めるケネーが、一般の動物生理にそれを認めるのは、きわめて当然のことと言わなくてはなるまい。しかるにデカルトは、身体の諸器官にこうした機能を断乎として認めず、したがってまた動物的生にも認めることを拒否するのである。

(8) もっとも感性をもつといっても、或る器官がそれだけで、充実な感覚機能をもつということではない。ケネーも、一方に身体が魂に感覚を生ぜしめるとともに、他方に魂が身体の運動を限定する (déterminer) ことにおいてなり立つ動物的生を、体軀の生理と簡単に混同してはならないことを注意している (pp. 126~127)。

かようにしてケネーは、動物が、感性のからんだ身体の生理に媒介せられて感覚をもち、知覚や識別や回想を行なうと同時に、情念や意欲を表出することを疑がわないが (p. 119)、しかし彼らの感覚による知識は、殆んど「経験」に組織だてられることなく、しかも相互に伝達せられない。そこに発展の大きな障害をもつことになるが、それに

もかわらずその知識は、時として人間のそれをはるかに凌駕することさえある。そのことはけっきょく、自然が、彼らの知識を「本能」によって補なうからに他ならない (p. 244)。まことに彼らの本能的な行動には、褒賞に値するものさえあるが、それらは専ら、身体の形相すなわち身体の有機体的（器官的）能力に依存するものと言わなくてはならない。われわれはそこにこそ、造物主（Auteur de la Nature）の英知と彼が定めた目的とを見なければならない、と語る (p. 247)。（前節注（5）を参照。）別の言葉で言うなら、ケネーにあっては、生体の形相たる《*âme végétative*》は、直接至高の存在につながるものである (p. 140)。しかも器官的能力は、感性和不可分に結びついている。しかるにデカルトは『叙説』に言う。「ある種の行動においてわれわれよりもすぐれた手ぎわを示めず動物はたくさんあるけれども、同じ動物が他の多くの行動では、そうした手ぎわをいささかも示めさないということは、これもまたきわめて注目すべきことである。それゆえ彼らがわれわれよりも、その為すところがすぐれているということは、彼らが精神（esprit）を有することを証明することにはならない。なぜなら、もしそうだとすると、彼らは、われわれのうちの誰よりもそれを多くもつことになろうし、また他のあらゆる物ごとにおいて、われわれにまさることとなるであろうから。ゆえに彼らのすることがわれわれよりもすぐれていることは、むしろ、彼らがいささかも精神をもたぬこと、彼らのうちにはたらくのは、自然そのものであって、器官の配合（*disposition de leurs organes*）にもとづくのだということを、証明するのである……⁽⁹⁾」と。

（9）Id.: op. cit., p. 51. 邦訳, 107～108 頁。

2 人の見解の微妙な相違は、ひっきょう、感覚に対してのデカルトの不信から来ると見ることができそうだが、たしかにケネーにあって、動物の感覚機能は、人間のそれと異なって、たんに受動的であるばかりでなく、言語を欠くがゆえに相互の伝達が不可能であり、したがって感覚が知識・経験として蓄積される道を阻まれている。それゆえにこそ「本能」が、それを補ない、代位をすることになる。その

みかケネーも、折にふれて動物的生をまったく機械的にとらえる。しかしながらケネーにあっては、動物の場合にも人間の場合にも、自然的知識の基礎となりうる感覚の機能が、その基盤として動物の生理を含むとも言えそうな認識（ただし感性が、生命原理たる「エーテル」によって与えられるという認識が、そこにからんでいる点に、注意を要しよう）、それゆえにまた、動物生理は感覚機能を媒介するのみならず、高次の精神機能をも条件づけることの認識、のあることが、おそらくデカルトの考えに対しての対立の核心を形づくっていると思われるのである。ところがデカルトにとっては、感覚はもともと不毛であり、確実な知識の基礎となることができない。「かようにしてわれわれの感官は、ややもすればわれわれを欺むくものであるから、感官がわれわれに有ると思わせるようなすがたで有るものは、何ひとつ存在しないのだと仮定することにした⁽¹⁰⁾」と述懐するくらいである。それに、上に見たケネーの把握とは異なって、『屈折光学』(La dioptrique)に、「感覚するのは魂であって、身体ではない⁽¹¹⁾」(C'est l'âme qui sent, et non le cors)という有名な言葉がある。だからして彼にあっては、人間的存在には、いやが応でも感覚能力を貶置せざるをえないにしても、もともと動物的生にかかる機能を認めたりする必要は、毛頭なかったと見ることはできないか。このように見てくると、ケネーが《âme végétative》と《âme sensitive》とを連続的に見たことは、ただ彼が無難作にアリストテレス的ないしスコラの教説に盲従したということには必らずしもならず、たとえそうした傾むきがあったとしても、そのことは、彼の感覚論的発想と結びついていたのではないかといういきさつに、気づかされるのである。まさしくわれわれはここに、ケネーの感覚論的構想の素地を窺うことができそうにさえ思うのである。

(10) Id.: op. cit., p. 28. 邦訳, 59~60 頁.

(11) Id.: La dioptrique, Oeuvres publiées par Charles Adam et Paul Tannery, sous les auspices du Ministère de l'Instruction Publique, VI, Paris, 1902, p. 109.

4

會って触れたごとく、ケネーはその「明証論」で、感覚が身体の組織によって媒介されること、ヨリ高次の感覚たる記憶すらもが、身体の組織をもととするところの、或る意味で身体的な能力であることを指摘するが⁽¹⁾、じじつ感覚論的構想は、ケネーにあってもまたコンディヤクにあっても、動物生理の把握によって裏うちされているのである。『動物生理』においても、もとよりこの観点は変わらない。すなわち感覚も知覚も、ヨリ高次の精神機能も、身体の組織に依存するということから始まり、ケネーは、動物の諸能力をとりあつかう第16章で、魂と身体との関係を中心として、論議をすすめるのである。感覚の原因が外部の客体にあること、感覚の担い手であるところの「感覚的存在」(être sensitif)のはたらきが受動的であること、そのこととからんで、もろもろの客体の本性はわれわれの感官にとり接近不可能であること、それゆえかかるものの探求を企だてる努力が無謀でありバカげていること、だからして賢明なひとは、われわれの認識の限界を超える点については、ただ信仰がわれわれに教えることのみを認容すべきこと、かくしてわれわれの探求は、一方では経験によって獲得される知識と、他方では信仰の教義とに矛盾しない「理性の光」の許容する範囲に限らるべきことなどが、この場合にも強調されるのである (pp. 162~163)。

(1) 前掲拙稿, 11 頁。

さらに第 17 章では、前章をうけて、人間と動物とを含めての感覚能力の展開の諸相が、かなり詳細に語られる。しかしその内容は、この当時の諸文献、たとえば上に挙げたコンディヤク、ド・ラ・メトリ、ドルバックらのそれと同巧異曲の面がかなりあると思われるので、ここでは、とくに『動物生理』に特徴的と思われる 2, 3 の点に触れるだけにとどめておこう。

先ずケネーは、感覚に 2 種を区別する。その第一は、客体が直接にわれわれに惹き起こすものであり、その二は、第一のものに附帯的な

もの、およびこれらの直接的ならびに附帶的な感覺相互の關係の感覺を指す。これが知覺 (perception) と言われるものに他ならない。(この知覺は、ほぼ、アリストテレスの「附帶的な感覺」に当たっている。次節注(3)を参照。)たとえばわれわれが音を聞くと、音の感覺は直接的感覺であるが、それと同時にわれわれは、音を發した原因である鐘を、われわれと鐘との距離を、鐘のある場所を、知覺する。なるほどこれらのすべては、感覺としては、一体をなすであろう。しかしわれわれはその中に、直接の感覺と、間接的な附帶的な知覺とを、區別しなくてはならないという。かかる感覺と知覺との區別は、ほぼ、「明証論」における「感情的感覺」と「表象的感覺」とのそれに、該當すると見ることができる。なぜなら知覺とは、われわれにものの延長、形態、遠近等を示めすものだからである。

しかるにケネーはさらに、この知覺に、人間と動物とに共通の感性的もしくは動物的知覺 (perception sensible ou animale) と、人間だけに特有の知性的知覺 (perception intellectuelle) とを區別する。後者がとくに「知性的」と名づけられるのは、たんに感覺に附帶するものでなく、人間の反省 (reflexion)、熟考 (contemplation) および判斷 (jugement) によって行なわれるものだからである。じっさい延長とか形態とか運動とかの捕捉は、感覺もしくは間接的・附帶的知覺によって行なわれるよりも、感覺または知覺を材料とする抽象的觀念として、知性的に把住されるのを普通とするからである。われわれはそこに、人間の「理性的魂」の能動的能力のはたらきを見なくてはならない(しかしこのはたらきも、後に見るように、「動物精氣」の運動によって媒介されるいきさつを看過してはならない) というが、「理性」(raison) とは、かかる能動的能力の名に他ならない。そしてかような能動的能力を導びき、そのしるしとなるものこそ、注意 (attention) であり、関心 (intérêt) であるとされるのである。(延長とか運動とか速度とか不可分性とかいう物体の性質の一般的觀念は、かようにして成り立つのであるが、特殊的觀念や作為的・仮構的觀念は、これらの一般的觀念を土台として形づくられるという。)

このようにしてケネーは、感覚からの感性的知覚と知性的知覚との成立を語るのであるが、ことに経験から得られる感性的知覚が、技術や実践的学問の基礎であることを強調し、かつ、かかる知識のうちに真理の確実性、すなわち「明証」の存立するいわれを説いているのは(pp. 291, 299), 「明証論」につながる思想的結節点の一つとして、重要視されなくてはならないと考える。それゆえかかる見地が、この書におけるマルブランシュ批判と結びつくいきさつは、興味をそそらずにはいないであろう。彼は言う、マルブランシュにおける(英知的)延長の観念は、まったく感覚から絶ち切られている。彼にあっては、この観念の把住は、神の無限を、無辺際延長を、見ること(*la vision de l'immensité, de cette étendue sans borne*)に他ならない。しかるにこの哲学者によると、この観念は、魂のうちにそれ自体の原因をもたず、魂に対して外から与えられるものなのであるから、それは、感覚から離れては存立しえない筈ではないか、と⁽²⁾(pp. 213~218)。

(2) マルブランシュの「英知的延長」の観念については、前掲拙稿、50頁を参照。ただしケネーのマルブランシュ批判には、かなりの誤解がからんでいそうである。(久保田、前掲書、44頁参照。)そうした点から、少なくとも『動物生理』の段階における彼のマルブランシュ理解が、それほど正確なものだったかどうかには、疑問がある。しかしここでのマルブランシュ批判は、少なくともその意図からすれば、感覚論的立場からのそれであるが、彼がロックを批判する場合には、その論拠がいささか奇矯にすぎる。というのは——なるほどロックが知識の根源を感覚に求めたことは正しいが、一般的な観念を仮構のまたは作為的な観念(*idées factices*)に関係させたり、これらの観念が魂の所産にすぎぬと考えたりして、一般的な観念の成立を、一般的な《*espèces impresses*》(次節注(2)を見よ)に求めることをしない。しかもこうした一般的な観念のゆえに、人間の「理性的魂」は、動物の魂から区別されると考えるのであるが、動物にも一般的な観念はある。即ち動物の場合にも、感覚中枢における精気の運動が、外物の刺激をうけて変容をし、したがって《*espèces impresses*》を形づくるからだ——というのが批判の狙いらしいからである(pp. 249~250)。この批判は、マルブランシュに対しての批判と比べると、批判の基準がまるで逆だという印象をいだかせる。すなわちこの場合は、スコラ主義またはペリバトス学派の立場からしての、経験論・感覚論の批判ということになりそ

うだからである。(もっとも上に触れたように、ケネーにおけるスコラ主義が、おそらく感覚論的発想と案外深く関連していそうな面も、看過されてはならない。) われわれはこのような点を思うにつけ、一部の哲学史書に書かれているように、フランスの感覚論ないし唯物論が、イギリス経験論の直接の投射であったとしても言いかねない解釈に、全面的には同じられない理由があると思うのである。

さらに上に触れた「判断」は、「理性的魂」の機能であるが、これに対してたんに受動的な識別 (discernement) は、動物的な機能にとどまるとか、この受動的な機能は身体の習慣的な素質にもとづくのだが、記憶や想像のはたらきは、それによって整えられるとともに、またかかる素質を維持するものなのであり、そこに知識が知識として定着することなどが、説述される。が、しかし、習慣はそのままでは、「経験」とはならないのである。ところでこの章でとくにわれわれの注意を惹くのは、上にも言及した「本能」のとりあつかいである。動物の知識は、経験によって拡大されたり、伝承されたりすることがない。「本能」とは、自然がこの欠陥を補充するためのものなのである。ところで繰り返しかえし述べるように、この能力は、身体の有機体的組織にまったく依存するものなのであるが、それゆえにこそそこに、造物主の英知とその設定にかかる目的とを、窺がいえなければならない、という。そればかりかケネーは、或る個所において、生体の、動物生理の玄妙な原理は、われわれの「理性的魂」よりも、はるかに英知的であり、はるかに有力であることをさえ述懐するのである (p. 227)。

このようにして「明証論」における感覚論的構想の輪郭は、ほぼこの書において打ちだされていると見るのできるのであるが、しかしながら注意すべきことは、ここでは、感覚の受動性が、原則として動物の《*âme sensitive*》のそれを指している点なのであって、かならずしも「感覚的魂」と「理性的魂」とを有する人間には当てはまらないことである。すなわち動物の《*âme sensitive*》は、身体の諸能力が魂に惹きおこすところの感覚を受容し、その感覚によって必然的にそのれを決定することにかぎられるのであって、それ自体、身体の諸能力に逆にはたらきかけることが殆んどできない。逆にはたらきかける

とは、本能的・反射的にではなく、これら諸能力の活動を停止したり、当の感覚以外の感覚を「魂」にもたらすことを命じたりすることを指すものと思われる。（ただし動物も、身体の諸部分を有意的に動かす能力はもっている。）この点で動物の場合は、人間のそれと異なっている。しかしこの相違は、ただ、人間と動物との器官またはその配合の相違に帰着するところの知識の多寡とか優劣（前に触れたように、動物の本能的知識は、時として人間のそれを凌駕することさえある）とくに尽きるものではない筈なのであって、そのことはほんらい、人間にあっては、感覚的諸能力が、もろもろの知性的諸能力（*facultés intellectuelles*）または精神的諸能力（*facultés spirituelles*）と、互いに含み含まれる関連を有することにもとづくためであることを知らなくてはならない、という。このことはひっきょう、人間にあっては、その《*âme sensitive*》が《*âme raisonnable*》と、緊密に連続的に結びついていることの指摘であると考えられるのである（pp. 164~165）。われわれは「明証論」において、ケネーにもいくらかのスピリチュアリズムへの傾向のあることをほのめかしたが、この傾向はこのような形で、『動物生理』にあらわれているのであって、その点からしても、「明証論」における感覚論的構想と『動物生理』のそれとの間には、些少なから眼につく差異のあることに気づかなくてはならないと思うのである。

ケネーは語っている。人間の（理性的）魂は、おのれの決定を左右しうる「動物精気」の運動の自然的方向を、変えたり、修正したり、停止したり、加速したりすることができる。それはまた欲するままに、感覚や知覚を弱めることも、保持することも、消滅させることも、再生させることも可能である。そればかりでなく、複合観念、抽象観念、仮構の観念などをつくりあげたりすることもできるし、またいろいろの観念を按配し、検討し、比較し、それらの関係をあきらかにし、評価をし、さらに確実な判断をするためにもろもろの知識を集めたりすることもできる。それからまた「魂」を行動に誘う動機や理由を秤量したりもする。すべてこれらの能力は必然的に、われわれの「魂」の

うちに、「動物精気」の運動を左右する力、活動力のあることを予想するのである、と (p. 194).

それにもかかわらずケネーは、反面において、われわれは、われわれの「魂」についていかなる知覚も、いかなる表象的観念ももつことがないし、いったいそれが、自由なおのれの決定を行なうに当たって、どのように生命の精気の運動をあやつりうるのかも、じつは不明なのだと述懐したりしている。たしかに人間の「魂」は、その身体に対してはたらきかけることが可能であるし、またそのことは、経験によって証明されるのだけれども、つきつめて言うなら、魂の意志は、精気の運動をただ限定する（その機会となる）にすぎないのであって、運動を左右する終決的な原因ではないのである。あたかももろもろの物体の間における衝撃が、それらのものの運動を結果する動力因 (cause efficiente) でなく、たんに限定因 (cause déterminante) または条件因 (cause conditionnelle), 言うなれば「機会的原因」であるのと同断である、という (pp. 194~195). ケネーはさらに、さまざまな例について、「魂」の無力を語る。「魂だけで、器官の協力なくして、いったいそれに何ができるというのか。」 (p. 124) 「それだから、われわれの魂の知恵も知識も能力も意志も、われわれの身体に生命を与え、それを維持するところのメカニズムにも、運動にも、活動にも、関与することがないのだ」と (p. 127). われわれはこのような説述のうちに、すでにはっきりと、われわれが曾って指摘したことのあるマルブランシストとしての彼の相貌を、かいま見ることができるよう思うのである。この場合われわれとしては、「魂」に対してのかかる懷疑とも不信ともいうべきものが、「明証論」の場合ほどではないにしても、やはり感覚論的構想と表裏をなすものであるいきさつを、あらためて確認する必要があるはしないかと考える。もっとも『動物生理』における感覚論的発想は、「明証論」のそれと比べて、それほど順序だっていない。感覚とその客体、魂と身体、の関係への切りこみ方が充分でない。このことは、あるいは、ケネーがそれから影響をうけたと思われるコンディヤクの実験論が、まだじゅうぶん精練の域に達してい

なかった事情と、照応するのかも知れない。まさしく感覚論の思想が思想そのものとして、まだ醸成の過程にあったということができそうだが、こうした思想が生理の理論と深くからみ会って発酵のすがたを示めしているところに、何といても、『動物生理』の特徴があると言わなくてはなるまい⁽³⁾。

(3) ハラーがケネーの「プネウマ」説に関連して、彼が「魂」の一切のはたらきを、身体的能力たる感覚に帰したのは、かなり唯物論的だと言っているのも、あるいは、当時の一部の批評を代表してのことだったのかも知れない。Oeuvres de Quesnay, p. 746.

5

ケネーにあっては、はじめに見たように、客体が感官を触発する(affecter)ことによって、神経組織中の「生命の精気」または「動物精気」を動かし、この精気の動きが脳髄に伝えられることによって、魂の変容たる感覚が成り立つのであるが、この精気の動きが習慣的な運動を身につけ、脳髄もしくは感官の神経のうちに軌跡(traces)を残すようになると、それが素質化し、魂の曾ってもった感覚と等しいそれを、魂に想起させることが可能となる。これが記憶と呼ばれるものに他ならないという(p. 166)。しかしこの記憶のはたらきなどについてわれわれのもつ知識は、まだはなはだ漠然とした曖昧なものなのであるが、それにもかかわらずそれは、かかる記憶の能力の棲家、したがってまた一般に精気と魂とが触れ合う魂の棲家と、この両者が作用し合うメカニズムとを推測させるに足りると述べて、この棲家をド・ラ・ペロニ(François Gizot de la Peyronie)の実験にしたがい、^{ぺん}肝胝体⁽¹⁾(corps calleux)または脳梁とするのである(p. 167)。肝胝体とは、脳髄の中にある神経組織の終点であるとともにまた始点であり、「動物精気」は、同じくこの場所に終っている分泌管(filet sécrétoire)の中で濾過された後、ここに供給される。このように一旦肝胝体に分泌されて、そこから、身体各部にはりめぐらされた神経組織に放流されるものとされる(pp. 170~171)。ところがこの分泌管は、感

性をもたないがゆえに、あらゆる解剖学的観察から、感覚神経の中枢は、この胼胝体にあるとされなくてはならない、というのがケネーの見解なのである。

(1) 胼胝体とは、左右の大腦半球の互いに相当する皮質の間を結ぶいわゆる交連線維の集まりであって、半球間裂の底をなす白色の厚い板 (la commissure blanche qui réunit les deux parties du cerveau) として、半球の内側面の間に存在する。南山堂版、医学大辞典、四版、867 頁。ケネーはこの胼胝体が、神経の集まりと分泌管から成るものと見ていた。大腦の或る部分、とくにこの胼胝体における変調が、魂におよぼす身体の諸能力のはたらきを全面的に停止させるという実験から、この部分こそ感覚的存在が、身体の諸能力のもたらす感覚を接受する場所であり、したがって魂の棲家でなくてはならぬというド・ラ・ペロニの報告は、1741 年度の『王立科学アカデミー紀要』(Mémoire de l'Académie Royale des Sciences) に発表されたい (p. 167)。ドルバックもその『自然の体系』の中で、この実験のことに触れている。[D'Holbach]: op. cit., p. 104, note (31)。高橋・三宅訳、自然の体系、上、世界古典文庫、149 頁。しかるにデカルトは、かかる魂の棲家を松果腺 (glande pinéale) と考えた。松果腺とは脳の四疊体の表面にある内分泌腺の一つだが、彼がそう考えたのには、彼らしい理由があつてのことであつた。Cf. Descartes: Les passions de l'âme. Oeuvres choisies par L. Dimier, Classiques Garnier, tome second, Paris, 1943, pp. 23~25。これに反してド・ラ・メトリは、松果腺とか胼胝体とかいう部分でなく、脳の四疊体 (nates) または脳の髄質 (moëlle du cerveau) そのものを魂の座と考えていたようである。De la Mettrie: op. cit., chap. X, § VIII

そこでわれわれは、ケネーについて、もうすこしこの感覚の機構を詮索して見ることにしよう。いったい外部の客体がもろもろの感官を触発することによって起こる視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚等の感覚は、どのようにして、一つの客体の印象に統一されるのだろうか。彼によると、種々の感官から受ける客体についての種々の感覚は、われわれがそのいちいちを覚知する (appréhender) のであるが、それらが一つの観念に結びつけられるのは、触発によって生じたこれらの感官の「動物精氣」の運動の変容、すなわち古人のいう《espèces impresses⁽²⁾》が、互いに消し合ったり、混じり合ったりすることなく、魂の

棲家に合流して、魂に客体の観念をつくらせるからなのである。ケネーはこの点を合流点 (confluent) と呼ぶが、一般に使われている感覚中枢 (Sensorium Commune) という用語をも用いるし、あるいは共通感覚 (sens commun) という言葉を、その同義語として使う場合もあるらしい⁽³⁾ (p. 136). もちろんこの中枢には、種々の客体の異なった印象も集まるわけであるが、いくつかの客体が神経のうちに共通の印象 (impression commune) を生みつける場合には、「動物精気」の運動の中にも一般的な変容が生じ、これによって魂は、一般的な感覚または知覚をもつことが可能となる。あるいはこれらをもととして、より高度の精神能力も展開することができる。ケネーが勝義において「共通感覚」と呼んでいるのは、おそらくこれらの場合を指しているのではないかと考えられるのである。たとえば延長とか秩序とか幸福などという印象が、これに該当する (pp. 248~249).

(2) 《espèces》とは、ギリシャ語の「エイドーラ」(eidola) のことであって、感覚的把握の直接の対象をなすものであり、感覚作用と客体との中間にあって、それらを媒介する実在と考えられた。マルブランシュの説明によると、これについての最も普通の見解は、ペリパトス学派 (Péripatéticiens) のそれであって、彼らは、外部の客体がみずからを型どった《espèces》を感官に刻みつけ、感官がそれを感じ中枢 (sens commun) に伝えることによって、感覚的認識がなり立つと考えた。彼らがそれを《impresses》と呼んだのは、外部の客体が感官にみずからを刻印する (imprimer) としたからである。この《espèces impresses》は物質的なものののだが、それが能動的知性 (intellect agent) によって知覚の材料とされ、したがって知覚化され、精神化されたものが《espèces expresses》と名づけられる。Malebranche: De la recherche de la vérité, introduction et texte établi par G. Lewis, tome premier, Paris, 1946, p. 237. ケネーが「生理」に密着した感覚論の立場から、このような考えをとり容れたことは、『動物生理』における感覚論的発想を特徴づけるものとして、その成果はともかく、興味をさそう点である。

近世ではアルノー、ニュートン、ゲーリンクス、ヴォルフらが、同じくこの考えをとり容れたというが、もちろんマルブランシュは、こうした見解を却けたし、またデカルトの否認も、きわめて特徴的であった。「……わが国の哲学者たちが普通考えているように、精神が感覚をするために、

客体からその脳髓に、いかなるものであれ、その似像 (imago) を送らねばならない、などと考える必要はない。または少なくとも、それらの似像の性質を、一般に考えられているのとはちがった形で、考えなくてはならない。なぜなら彼らが、それらの似像について、それらがあらわす客体に似ているということ以上に、何も考えていないとしたなら、彼らはいかなる根拠によって、それらが客体によってつくられ、感官によって受け容れられ、そして最後に神経を通じて脳髓に運ばれうるのかを、説明することができないからである」。(Observandum praeterea, animum nullis imaginibus ab obiectis ad cerebrum missis egere ut sentiat (contra quam communiter Philosophi nostri statuunt), aut ad minimum, longe aliter illarum imaginum naturam concipiendam esse quam vulgo fit. Quum enim circa eas nil considerent, praeter similitudinem earum cum obiectis quae representant, non possunt explicare qua ratione ab obiectis formari queant, et recipi ab organis sensuum exteriorum, et demum nervis ad cerebrum transvehi.) Descartes: Dioptrice, caput quartum, De sensibus in genere, Oeuvres, publiées par Adam et Tannery, VI, p. 599. 物質的なものがどうして精神化されるのか、というデカルト哲学にとっての根本的なアポリアが、この論述のうちにもはっきりと示めされている。なお『屈折光学』の中のこの箇所は、仏文よりもラテン文の方が意味がよく通ると考えて、敢えてラテン文から引用した。

(3) 共通感覚 (sens commun, sensus communis) という用語も、アリストテレスから出ている。色とか匂いとか、それぞれの感官を通じて生みだされるいろいろの感覚が、どのようにして、たとえば一つの芳香を放つ白い花の感覚として、結びつけられるのか。これらべつべつの感覚を一つの客体の印象に統一する感覚器官は、あきらかに存在しない。それにもかかわらずわれわれは、香ぐわしい白い花を感覚する。かようにこれらの感覚が一つの客体の印象として成りたつのは、まず、種々の感覚を区別するはたらきが先立たなくてはならないのはもとよりであるが、それとともに、一方に同一の感覚的存在が、同時にこれらの感覚の主体であるからであり、また他方においてわれわれは、一つの客体についてある感覚をもちながら、それと関連して附带的に、同時に、べつの感覚をもち（このはたらきは、ケネーにあっては、狭義の感覚から区別された知覚 (perception) の作用である）、さらに感覚するみずからを感覚しうるからであると考えられる。かくして「共通感覚」は、感覚の客体の同一と、感覚する主体の

同一と、それから感覚を感覚する意識の存立とを条件として、成り立つと
いうことができる。(アリストテレスの原義には、まだいろいろの問題が
からんでいるようだが、詳細は前掲の『デ・アニマ』第3巻と山内得立、
アリストテレスの *Sensus Communis* について、『商学研究』第8巻第
4号、を参照せられよ。) ケネーがこの言葉を「感覚中枢」の同義語とし
てとりあつかう場合は、それによって、「共通感覚」の存立する生理学的
な場を指示するためだったのであろう。しかしながら彼においては、この
語は、いくつかの客体についての感覚を総合し、抽象した共通の一般概念
としての意味に使われている場合もあるらしいことを、注意しておく。

われわれは上に、「明証論」において、感覚や記憶の作用が、身体の
組織によって媒介されること、高次の感覚たる記憶すらも、身体組織
をもととする身体的能力であることが指摘されているいきさつに触れ
たが、「動物精気」の運動が、脳髄もしくは感官の神経のうちに軌跡
をのこすことによって記憶が成りたつ事情につき、ケネーはさらにこ
うも語っている。精気の運動が外物の刺激によって変容するとは、運
動が或る形をとることであり、外部の客体から《*espèces impresses*》
を受けとることなのである、と。この「印象」が感覚中枢に伝えられ、
魂の棲家に保存されるということらしい。ところが知性的な記憶の場
合には、記憶は「注意」によって可能となるのである。注意とは魂が
それを欲するとき、「印象」をひきつづき魂に作用させることによっ
て、「観念」を保有するところの能力である。「印象」をひきつづき作
用させるのは、注意のはたらきが、もともと身体的な作用であり、そ
れが「動物精気」の動きに変容をもたらし、この変容が神経中枢に伝
えられ、軌跡を残すことによって、「印象」の持続が可能となるから
である、と。このはたらきによって魂は、それを欲するとき、曾って
もった観念を想起することができるのである。そしてこのようにして
なりたつ記憶が、魂にそれ自体の持続的な存在を自覚させ、一般に
「意識」を形成するのだという (pp. 315 et seqq.)。デカルトでは明晰
判明な知識を生む精神作用として、またマルブランシュにあっては、
有限な精神をして無限の理性にあずからしめ、「観念」を把住する機
会となるものとして重要視された注意の作用が、能動的意志によって

刺激される器官の活動、身体的な作用としてつかまれていることは、注目に値するであろう。(ただしケネーはある個所では、それを自由の能力として性格づけている。)

注(2)に引用したごとく、デカルトは、物質的な「印象」が、非物質的な感覚機能(sensus externus)によって受け容れられるという考えを否定した。ところがケネーが、たとえ生理学の立場においてであっても、上述のような見解を大胆に吐露していることは、それこそ、彼の考えが、よし部分的であるにしる、唯物論的だときめつけたハラーの批評を、裏書きすることにならないであろうか。じじつ『動物生理』と同時代に、ほぼ同じ状況のもとに書かれたド・ラ・メトリの『魂の自然誌』における構想の唯物論的特徴の、少なくとも基本線の一つは、感覚的存在が、したがって魂が、物質的なものでなくてはならぬということであった。外部の物体やそれ自体物質であるところの身体と異質な、非物質的な魂が、どうして外部の物体と交渉をもち、身体と作用し合うことができるのか。物質と交渉し、物質と作用し合うものは、それ自体物質でなければならぬというのが、彼の論理であった。「もし魂の棲家に何らかの拡がりがあるとするとするなら……魂が、デカルトの主張するように拡がりをもたないなどということは、ありえない。けれどデカルトの体系では、魂は身体にはたらきかけることができないし、二つの実体の結合と相互の作用とを説明することは不可能である。……このことは、ルクレティウスとともに、もしそれが物質的なものでないなら、魂は物体にはたらきかけることができない。ところが魂は物体に触れもするし、いろいろな方法でそれを動かすところをもって見ると、魂は実際には物質なのだ(tangere nec tangi, nisi corpus, nulla potest res), ということにならないであろうか⁽⁴⁾。」

(4) De la Mettrie: op. cit., chap. X, § VIII. なおこの『魂の自然誌』(Histoire naturelle de l'âme, 1745)は、1751年再刷の時『Traité de l'âme』と改題された。筆者私蔵の『哲学著作集』(1753年)にも、この改題で収録されている。ドルバックもほぼ同じ意見である。「延長を欠きながらも、われわれの感官、すなわち延長をもつ物質的諸器官にはたらきか

ける（魂という）実体についての觀念を、どのようにしてつくることができるのか。延長をもたぬ存在が、どのようにして運動し、また物質を運動させることができるのか。」〔D'Holbach〕: op. cit., p. 90. 邦訳, 134 頁。 「非物質的であって、物質となんらの接触点ももたず、類似もしていないのに、物質にはたらきかけ、またもろもろの存在の現存を示めす物質的諸器官を通じて、物質からの刺激をうけるなどという存在を、ひとは本当に想像することができるであろうか。」 Ibid., p. 98. 邦訳, 143 頁。 精神と物質、魂と身体という二つのものの関係が、17 世紀の諸体系におけるがごとく、実体（という言葉は時として用いられるにしても）という見地からでなく、むしろ因果関係という観点から眺められるようになったこと、したがってこの両者の間に何らかの関係がなくてはならぬとするなら、原因であり結果であるものは、どこまでも同質的なものでなければならぬという見解が力を得てきたことが、18 世紀の唯物論の方法的特徴であったことを、カッシーラーは指摘している。 E. Cassirer: *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen, 1932, S. 89.

6

筆者は本稿を草するに当たり、ケネーと並べて、おもにデカルトとド・ラ・メトリとを頭においた。デカルトは医業にこそ携わらなかったが、かなりの年月を生理学と解剖学との研究に捧げた人であったし⁽¹⁾、ド・ラ・メトリは、ひとも知るごとく医師であり、かつ生理学者であった。しかもケネーと同時代人であり、2 人とも、前述の紛争にまきこまれていたことなどが、余計彼に対しての関心を掻きたてたのである。

(1) デカルトについては、主として『方法叙説』と『情念論』とを参照したが、ル・フェュブルが指摘しているように、ことに『叙説』の第 5、6 部が問題である。しかしデカルトの生理学を本格的に研究するには、彼の死後 (1662~1677) 公刊された『人間論』(Traité de l'homme) と『胎児形成論』(Traité de la formation du fœtus, ou La description des corps humain) が重要であり、いずれも上掲のアダム・タヌリ編の『全集』第 11 巻に収められているが、筆者は或る事情のため、今回はこれらを充分に利用する暇をもちえなかった。『叙説』の第 5 部は、これらのレジュメに当たる。なおデカルトの生理学の研究のためには、つぎの文献を参照。 Dreyfus Le Foyer: *Les conceptions médicales de Descartes*,

《Etudes sur Descartes》, publication de la Revue de métaphysique et de morale, 1937. Henri Lefebvre: Descartes, Grandes Figures, Paris, 1947., pp. 244~270. ド・ラ・メトリに関する最近の研究書としては、つぎのものを挙げておこう。A. Vartanian: La Mettrie's l'Homme Machine, a Study in the Origins of an Idea, Princeton, 1960. Raymond Boissier: La Mettrie, médecin, pamphlétaire et philosophe (1709~1751), Paris, 1931.

じじつ『動物生理』を『魂の自然誌』と比べて見ると、ちょっと驚ろくほどの構想の類似が眼につく。いちいち挙げればきりがないが、先ず感覚論的発想の点でも、かかる構想に立ちながら、程度の差こそあれ、魂の無力を言ったり感覚の限界を指摘したりする点でも、上に見た反デカルトの論調からしても、さらには形相と質料、「実体的形相」、「植物的魂」、「感覚的魂」、「理性的魂」、「動物精気」、「感覚中枢」等の用語を駆使して、あきらかにアリストテレスのもしくはスコラ化されたペリパトス学派の影響を示めている点などからしても、その類似は覆うことができない⁽²⁾。ことにわれわれはブルハーフェの弟子であったド・ラ・メトリにおいても、原動的形相 (formes motrices) を寒・熱と考えたり、ガレノスを尊重したりする一種の権威主義めいたものに、ぶつかるのである。(しかしこうした傾向は、あながちケネーやド・ラ・メトリだけのことではなかった。) われわれはこの両者において、このような類似を見るのであるが、しかしそれにもかかわらず、両者の間に本質的な相違の存することも、看過されてはならないのである。

(2) Cf. Vartanian: op. cit., III. スコラ主義と最も対決的であったデカルトにおいてさえ、「共通感覚」とか「感覚中枢」とか「動物精気」とかのスコラの用語が、スコラ的意味において使われているという。デカルト哲学とスコラ哲学、ないしスコラ主義との交渉をとりあつた文献に、つぎのものがある。Alexander Koyre: Descartes und die Scholastik, Bonn, 1923. Etienne Gilson: Etudes sur le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système cartésien, Paris, 1930.

いったいケネーは、『espèces impresses』などという観念をとりいれて、感覚の成立を生理学的に説こうとする場合、「魂」をどう見てい

たのであろうか。《âme sensitive》の性格如何の問題である。われわれにとってはこの「魂」が、「明証論」などとはちがって、いちじるしくアリストテレス風に、もしくはスコラ化されたアリストテレス流に、とらえられているらしく見えるところに、問題の所在を感じるのである。ド・ラ・メトリにあっては、同じような影響を受けながら、いずれの「魂」も、物質であった。しかるにケネーにおいては、いささか事情を異にしているらしい。筆者はこのことと関連して、筆者なりの見当をつける手がかりとするために、むかし読んだことのあるフランツ・ブレンタノのアリストテレス解釈を、ここに想起して見たい。

われわれは前に、アリストテレスにあっては、生命の原理たる魂は、その形相的活動において、身体の目的を実現するものであり、身体はまた目的実現のための道具に他ならないが、身体の諸器官とは、その組成において、まさしくそのような道具としての意味をもつものでなくてはならぬことに触れた。生体の形相たる「魂」は、生命をその可能態としてもつ物質の現実態でなくてはならなかったのである。このことは、「植物的魂」と「感覺的魂」とには、たいして異存なく当てはまりそうである。なぜなら感覚は、生体に随伴する能力であって、生体とその生滅をともにするものとされるからである。しかるに人間的生を特徴づける「理性的魂」については、どうであろうか。この「魂」は神的なものであり、人間的生において、永遠のものを可滅的なものから区別するいわれとなるものでなくてはならぬからである。それゆえ人間の生は、他の生物の場合とちがって、物質的であるとともに「精神的」である。それにもかかわらず、とブレンタノは言う——アリストテレスは人間を、二つの異なった実体の結合とは考えなかった。むしろ唯一の統一的な実体と見た。なぜなら一つの存在が、いかに異なった部分から組成されていようと、それらが結びついて唯一の統一的な存在を形成することを妨げる理由は、いささかもないからである。たしかに感覚の主体としての人間は身体的であり、思惟の主体としての人間は精神的である。ところが感覚とは、連続する諸部分を結びつけるものであり、したがってかかる性格 (Akzidens) をもつ

感覚の主体は延長をもつべきだが、これに反して思惟は、連続する諸部分を結合するものではない。それゆえ思惟の主体は延長をもたない。とは言うものの、そもそも感覚と思惟とは、ものの把握の諸部分として、ほんらい相属する(zugehörig)筈のものであるがゆえに、したがって「感覚的魂」と「理性的魂」とは、統一的であるのではなくてはならない。もちろんこの統一のイニシアティヴは、「理性的魂」の側にあるとしても——と⁽³⁾。

(3) Franz Brentano: Aristoteles und seine Weltanschauung, Leipzig, 1911, SS. 130 f. この問題には厄介な「能動的理性」と「受動的理性」のそれがからむが、ここではそれに立ち入らない。

ここに引いたブレンタノのアリストテレス解釈が、専門家の間で、どれほどの権威をもつものなのか。殊に彼の見解は、三つの「魂」を連続するものと解釈した例として挙げたのだが、そうした狙いに狂いないかどうか。「感覚的魂」と「理性的魂」とが統一的であると考えられても、統一的ということが、そのまま連続的ということになると見てよいかどうか。筆者はそれらの点にそれほどの自信をもたない。だいいちケネーが果たして直接アリストテレスを学んだのか、それともスコラ化されたペリパトス学派の考えを伝承しただけなのかも不明なのであるから、そうした状況を知っていながら、ブレンタノの解釈をもち出したりするのは、ちょっと筋の通らぬ援用だと思われるかも知れない。しかしかりにアリストテレスにおいて、三つの「魂」が連続したものと考えられる余地があり、そしてことに人間的生において、「感覚的魂」と「理性的魂」とがほんらい統一をなすべきものであるがゆえに、その関係は断絶したものでなく、したがってその両者はまったく異質のものとは考えられぬ理由があるとするなら、それはかなり、『動物生理』におけるケネーの見解に近いのではないかという憶測を言いたかっただけなのである。そしてケネーについてもう一つ言っておきたいことは、やはり彼が、アリストテレスまたはその学派を、一つの権威として受けとったというよりも、これまでの追求の過程において示めされたように、彼自身の生理学的ないし感覚論的発想から、

むしろ、そうした考えに接近していったのではないかというのが、筆者の心証だということである。ケネーにもたしかに、ハラーの指摘したように、権威主義的な、事大主義的なところはあったであろう。しかしながら彼はまた、尊敬するプールハーフェをも、マルブランシュをも、アリストテレスをも、ましてスコラ主義などを、決して無批判には受け容れていない。アリストテレスに対しては、はっきりその名を挙げているわけではないが、もし生体の形相を諸器官の組み立てとしてでなく、「感覚的魂」や、ことに「理性的魂」と解するとするなら、それは誤りである。生体に生命を付与するものは、決してそれらのものではない、という批判を加えているのである (p. 126)。

しかしながらケネーの見解が、よしんばアリストテレスに近いとしても、近いというのはどういう意味なのか、そしてまたその相違点はどこにあるのかが、やはり問題とされなくてはならないであろう。ところがこの問題を追求するとなると、ケネーが「生理」の構想を土台として、感覚機能と理性機能とをどう結びつけたかが重要なこととなるのであるが、すでに与えられた紙幅をはるかに超過してしまったここでは、第 18 章に展開された「理性的魂」の諸能力の説明を充分に利用して、さらにこの問題の分析をすすめることができない。だが今まで見てきたところからも推測がつくように、ケネーは三つの「魂」を（或る意味でアリストテレス風に生理とも心理ともつかず）、連続的に見ながら、一方では、「本能」のとりあつかいにもあらわれているように、動物生理の原理をもって、われわれの「理性的魂」よりもはるかに英知的なもの、はるかに全能のものと考え、生体の器官の配合、その運営のかげに、神智を見ているとともに（この見解も、或る意味でアリストテレスにおけるテレオロジーに通じる）、反面には、理性的能力の限界に信仰の意義を認め、かかる能力の遂行のために、超自然的な加護を期待する意向を仄めかす。それゆえアリストテレスの場合のように、一般に上位の魂が下位の魂を可能的に自からのうちに含むという見解だとか（ブレンタノが、「感覚的魂」と「理性的魂」との統一のイニシアティブは「理性的魂」の側にあるといって

いるのは、このことと関連する)、殊に最高の「理性的魂」が、それ自体神性を表わし不滅であるという思想などとは、判然と区別されなければならない。ケネーの場合には、「理性的魂」も、ひっきょうは、人間の魂そのもののなのであり、その無力が語られなくてはならないのである。(両者において、三つの魂はほぼ連続的であると言いえても、アリストテレスでは、「感覚的魂」と「理性的魂」との間に口を開いた淵があり、ケネーの場合には、「植物的魂」と「感覚的魂」との間に一応の溝がある。)

もっともケネーにあっても、「理性的魂」は「感覚的魂」と単に同質的であるのではない。「理性的魂」の諸能力は、動物の感覚能力のように、純粹に受動的な能力ではないのであって、思うままに動物的な身体的諸能力に対して作用をおよぼすところの精神的、知性的且つ能動的な実体 (*substance spirituelle, intelligente et active*) だと規定されたりするのである。人間の自主的な反省も、熟考も、判断も、推理も、意志も、したがってまた人間がみずから決定する行動の自由も、かかる能力に属するのでなければならない、と言う。しかしこれらの諸能力も、つまりは感覚からの発展なのであり、感覚的諸能力をさらに秩序づけたもののなのであり、それらと互いに含み含まれる関係をもつものである以上、やはり感覚的能力の場合と同じく、われわれの身体的能力によって条件づけられているいきさつを、充分察知しなくてはならない。この点についてのマルブランシュ批判は、なかなか重要である。第4節の注(2)とも関連することであるが、「理性的魂」が作爲的観念をつくろうとするには、ただそう意志するだけでは足りない。(意志はけっきょく、「限定因」もしくは「条件因」にすぎぬのである⁽⁴⁾。)そこにはどうしても、身体的能力の援助がなくてはならない。マルブランシュの言ったように、われわれの観念の原型 (*archétype*) もしくはモデルが、神性のうちにあるというのは、誤りである。なぜなら「原型」は、他ならぬ「感覚中枢」の中にあるからである。この中枢が《*espèces impresses*》を保有するからこそ、それをもととして、魂はもろもろの観念をつくりうるのである。高次の観

念の形成の秘密は、まさしくこの「中枢」の中にあるのでなければならぬ、と説くからである (p. 290)。

(4) いうまでもなくこのことは、マルブランシュの偶因論の基本的規定の一つである。(前掲拙稿を参照。)しかしケネーも、人間において、能動的な意志が果たす役割の重要性を、充分認めてはいる。ただここに能動的というのは、ものを活動させたり、運動させたりする基本的な力となるということではなくして、みずからの決定を行なう自発的な意向または意欲ということである。たとえば或る目的のために手段を選択し、それらについて熟考をしたり、判断をしたり、決意をしたりする積極性(自由)を意味するのである。

『動物生理』における生理学とからみ合った哲学の基本的な特徴は、何といっても、生理の構想に裏うちされた感覚論的発想にある、ということができるであろう。生理の構想の展開にあたっては、スコラ的ないしペリパトス学派的な自然学の影響の跡が拭いきれない。しかしながらケネーの考えは、アリストテレス的な形相・質料観とは、やはり区別されなくてはならない。なぜなら、理性機能は可能的に感覚機能を含み、感覚機能はまた生長機能を含むという形では、理性・感覚・生命の序列が考えられていないからである。その意味では、かなり唯物論的であるという評価も、あながち不当ではありえない。だが反面において、マルブランシュからくる影響も、不問に付することができない。それどころかケネーにおける人間把握は、デカルト学派、ことにマルブランシュにつながる線が、最もつよいようにさえ考えられるのである。ただ『動物生理』を後の「明証論」と比較するとき、われわれは前者が、後者に比して、人間の生を自然的な知識と実践の枠内で捉えようとし、それほど積極的にそれに信仰の契機を結びつけようとししない点に、一つの特徴を見出だす。このことは『動物生理』にある程度あらわれているスピリチュアリズムの傾向とも、無縁ではないであろう。もろもろの思想的動機がもつれ合い制約し合っているこの姿は、まさしく発酵という言葉をもってあらわすにふさわしい気がするのである。